



清俗紀聞

第六

以上六本犬尾	卷之十二 祭禮	數帙
--------	---------	----

五四七
六

37
3522
6



門77
號3522
卷6

清俗紀聞卷之十二

祭禮

○先祖を祭ふは正月三月十月定式の祭祀あり夏至冬至祭ふは有
 けし家廟一少祠堂わけて冬は正月の初年の十二月廿九日の以主人盛
 服ハカマ潔淨ハカマを著し家廟に至り神主の衣ハカマ拈香ハカマ一拜ハカマ一跪ハカマ神主に
 むかひハカマ今ハカマ迎春恭奉祭祀と告ぐ廟の側ハカマ高卓子を置くお祀神主
 を暫く移して後家廟を掃除潔淨ハカマ掃除ハカマの儀ハカマ先ハカマの志ハカマく神主を安置
 し神主ハカマ後ハカマ真像ハカマをハカマ一ハカマ真容圖ハカマ又ハカマ前ハカマみ香ハカマ白ハカマ糸ハカマ絨ハカマ香ハカマ爐ハカマ燭ハカマ臺ハカマをハカマ傍
 付ハカマ其ハカマ前ハカマみ高卓子をすく大ハカマあら花ハカマ瓶ハカマみハカマ花ハカマ瓶ハカマの造ハカマ礼ハカマをハカマ以ハカマけ
 置ハカマ造ハカマ花ハカマ瓶ハカマの造ハカマ礼ハカマをハカマ以ハカマけハカマ置ハカマ造ハカマ花ハカマ瓶ハカマの造ハカマ礼ハカマをハカマ以ハカマけハカマ置ハカマ
 分ハカマ挿ハカマ一ハカマ方ハカマ燈ハカマ籠ハカマをハカマかき燒ハカマ物ハカマのハカマ皿ハカマみハカマ苜ハカマ枝ハカマ竜ハカマ眼ハカマ落ハカマ花ハカマ生ハカマ松ハカマ子ハカマ

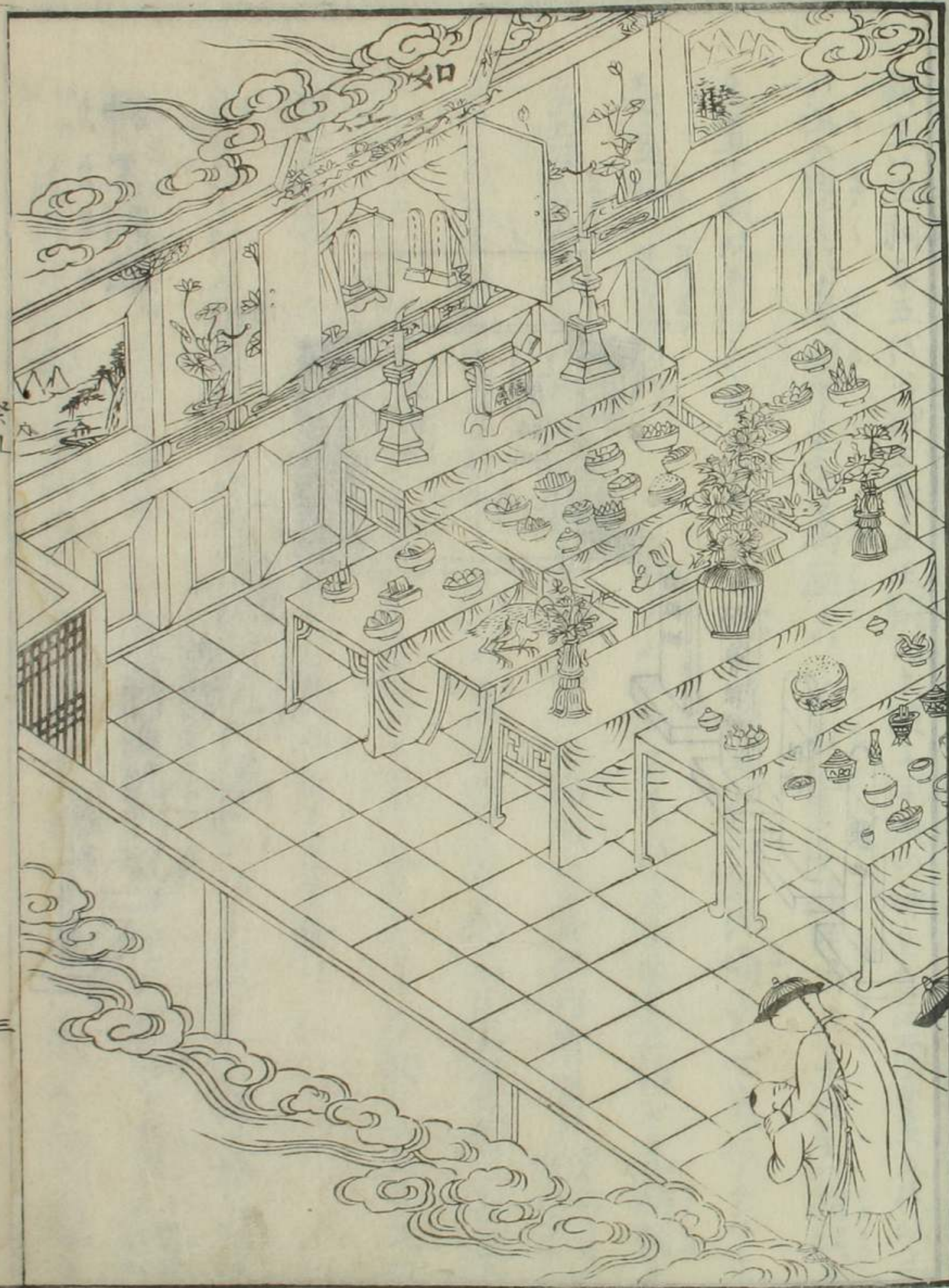
祭禮



昭和41年12月20日
原安三郎氏贈

東瓜糖桔餅或ハ糕餅菓物種々ありひみ大根みく水仙花菊等儀制衣
 供物都合三二十只備へ至元朝みら主人早辰み沐浴盛服を
 子孫守姪を引領ち家廟へ至り廟外にて盥洗一燈を照し三牲
 を備へ饌我進す饌を魚肉野菜菓物中にて磁器に盛り爵盃み酒を盛主人
 跪く不盃を奠し畢りて拈香供養す漢人ハ四拜満人ハ三跪九叩首多主人拜畢りて嫡子庶
 子伯叔父姪婦女等同居の親族まじりて拜す廟拜畢りて家内の祝儀
 を述己の中刻以て徹饌す廟の卓子徹饌の時も主人子孫前此志く拈香供養
 ち徹後三牲ありびみ饌の徹す其余の供物と共俵を収めたり
 十八日み至り徹す饌を徹して暮るる三牲やらびみ饌の物を煮盡して
 家内残らず食ひ乞成薦酢と不進饌と元日よりめて二日よりと
 進饌眞酒等の事か十五日上元佳節ハ早辰に主人盛服一

多燭以照し香成拈し眞酒寸三牲供物等そ収り十八日早辰
 主人盛服し子孫を引領して盥洗し拈香礼拜し跪て神々を
 恭請徹位と告り諸供物を徹し廟厨の扉を開して茶の香案
 香爐燭臺を置く並廟門を開す



祭

三

家廟祭之圖



○先祖祭み致齋齋戒等の事ありなりびに庶民の祭文はもちひす家御紳等ハ祭文を用也○祖父母父母の喪中ハ毎月忌辰ありひ朔望神主ノ奠酒拈香して禮拜に毎日拜す事希之葬らざるべし其日ハ朔暮ハ柩前ニ拜をれ奠茶奠酒奠茶等あり葬らざるべし喪期の内ハ神主成廳堂ニ立置朔望忌辰の拜のあり喪期満ク神主を祠堂ニ移してハ父母ともども毎月忌辰の祭祀なり朔望ハ燭を点し拈香奠酒して禮拜す本忌辰日ありとも祭事奉ふし且忌辰ハ子孫吃素す奉ふれ喪終りて後ハ周年一周三周年三年法會成執仍ハ祭事此際僧道を請ト追薦を三年後ハ十年同毎追祭す法會ハ僧道を請ト誦經をりハ家廟中ニ多くハ仍ハ又廳堂ハ法會の神主之位を移して祭事あり僧道ノ布施として銀ありハ錢を送る

先を懺資として僧一人一日錢百文或ハ百五十文程銀ありハ五分二ノ位住持長老等銀十文程を修法より始口等執仍の位ハ三百同五百同身分に應ハ不同あり是ハ供物料多きて其内あり又誦經の上齋非時の食米を出し齋厨を早齋と云非時を晚齋と云僧誦經の音ハ盤木魚を鳴す此具ハ僧道ヲ持素あり又家祭ハ人並ハ盤木魚の圖式多ク僧徒又喪中の法會の音ハ僧道ハ線香蠟燭ヲ持素して賜ふ事あり喪中ハ平常の法會ニハたらく其誦經文ハ大畧普門品金剛經等あり其餘ハ詳み知事あり○周年二年十年同毎の法會追祭の式ハ春秋祭祀ハ朔望みハ家廟ハ三牲一副魚肉菓子類十種程を供主人早辰沐浴盛服して神主と酒を奠し拈香禮拜す

祭札

六

○開祖考妣祖考妣頭考妣と其人の誕生日み廳堂へ真容圖をり
 香三牲魚肉菓子類をそま燭を点し饌を進し眞酒拈香し
 祭式翔望みねふし是を眞期とす眞容圖へ父祖の末期面像
 并躰を正写みして掛物ふ仕立永遠追慕して忘ぬき免ふ祭期
 終るに在りてうをまふ又五六十歳をありて自身の像をうけ
 ねくまあるを我平時得意の像をうけをふく人ば山水城郭の
 景山中ありて景物遊玩の躰をうけしあはれ琴碁書畫をふれ
 志心類をうけし是を行樂圖とひ又眞容圖とふ

真容圖



祭礼

○祭器卓碗碟等々多く平時需用の器潔淨なる哉用也人ゆる外み侍へ

るもあらと希なり ○家廟の大小廣狭を身が家貫の貧富みよる等

かす方位向きの家作の向み應は只北向を嫌ふ廟中平時の掃除點燭ホ

ら奴僕經手は掃除等の時廟厨の扉をみざるみむらす

○主人出入み祀に告ふ事かからみ生子は常家廟み見くあむら事

か子孫做親み必告ふ ○中秋重陽冬至の佳節みむら家廟

を祭ふ事れ一を家の舊例みよる執りあをあら一定み何す

○家廟み佛像を安置せば神主あり佛像の内廳み厨子を補ひ

安んず ○先祖の遺物の封固して潔淨ある匣み入る收貯一安み

他み出さ遺物分給の事親族隠る遺命あれい送る子孫あて

檀み賜ふ事を得て是親族或は至る親も朋友等先祖の筆跡を

を所望す此の家廟み昔々詩文章の類の筆跡を賜ふもあら衣履靴

具等と賜ふ事か親をあら所をら事もか

○水火非常の節に吊刻家廟み至る神主を殘らば一収集り櫃箱ホに

收先子孫子姪附随ひ難を逃し親族朋友又ら寺院等預置危難

移る後廟所恙るは時と移して祭祀を執りて是廟一竹燒失流

失破損等み後を事あられば外み假廟を設け安置一臨時ホ

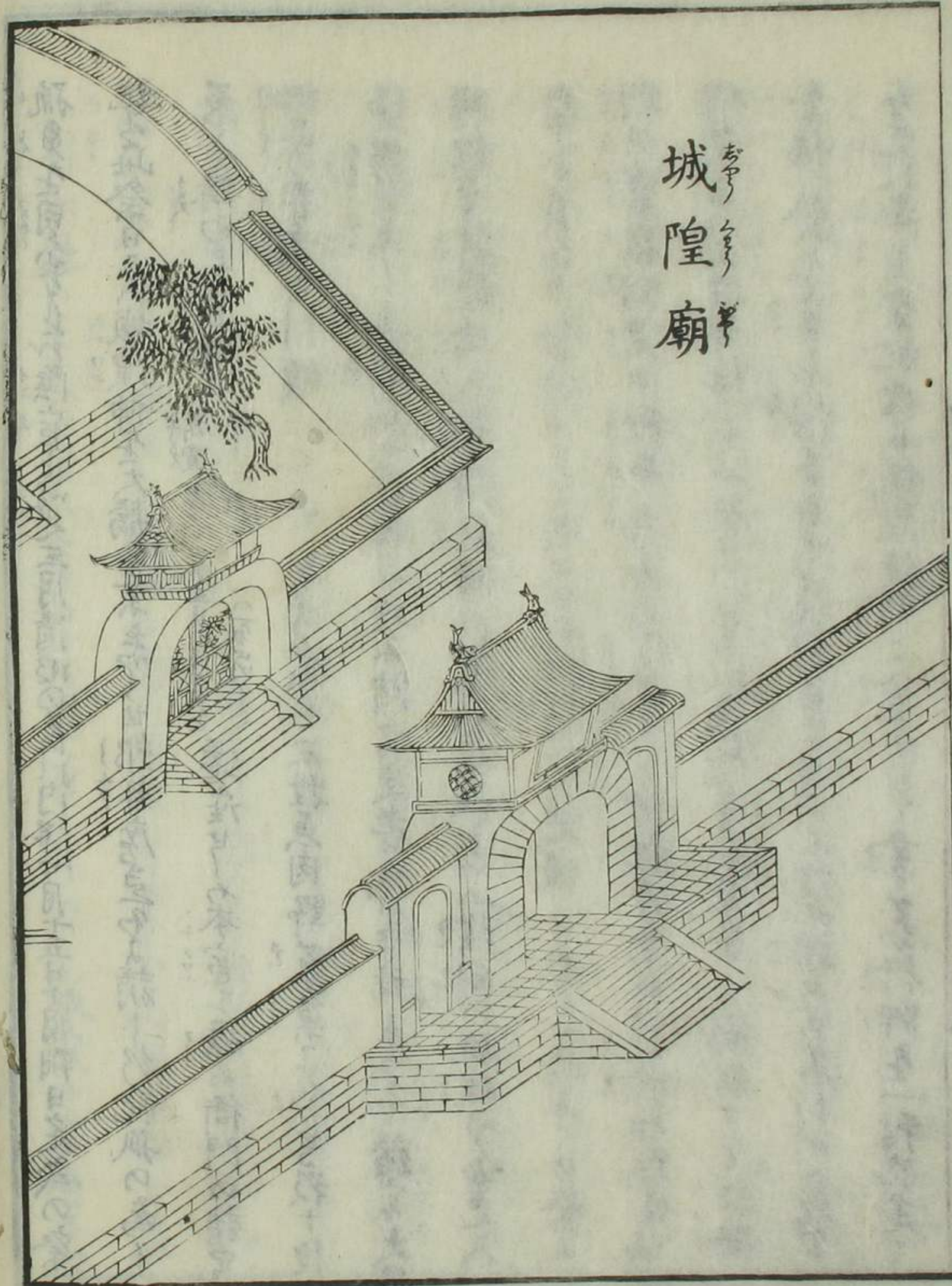
祭祀を執行す是を厭忌敬馬祭祀とみ取集る時ハ事急るゆ禮

儀み及むら急難たりとも家廟を收めざる内ハ外事

及る ○唐禱の祭祀一小洋大洋と則周年二年あり

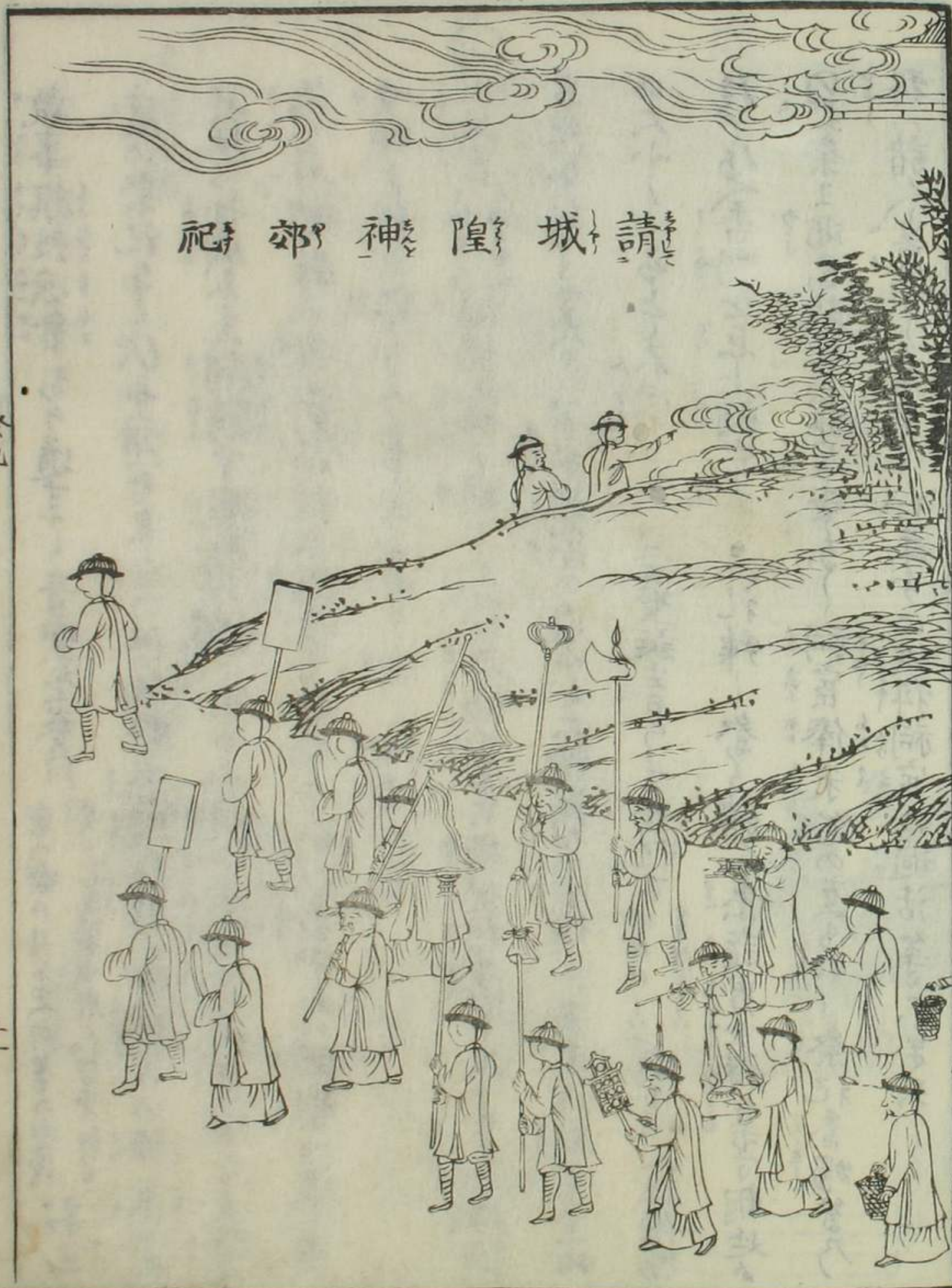
○城隍と古一其地み徳を誦する名官卿賢を城隍神と崇め其地の守護

と諸省府州縣ともみ廟あり知縣以上の官到任して三日同あらひ



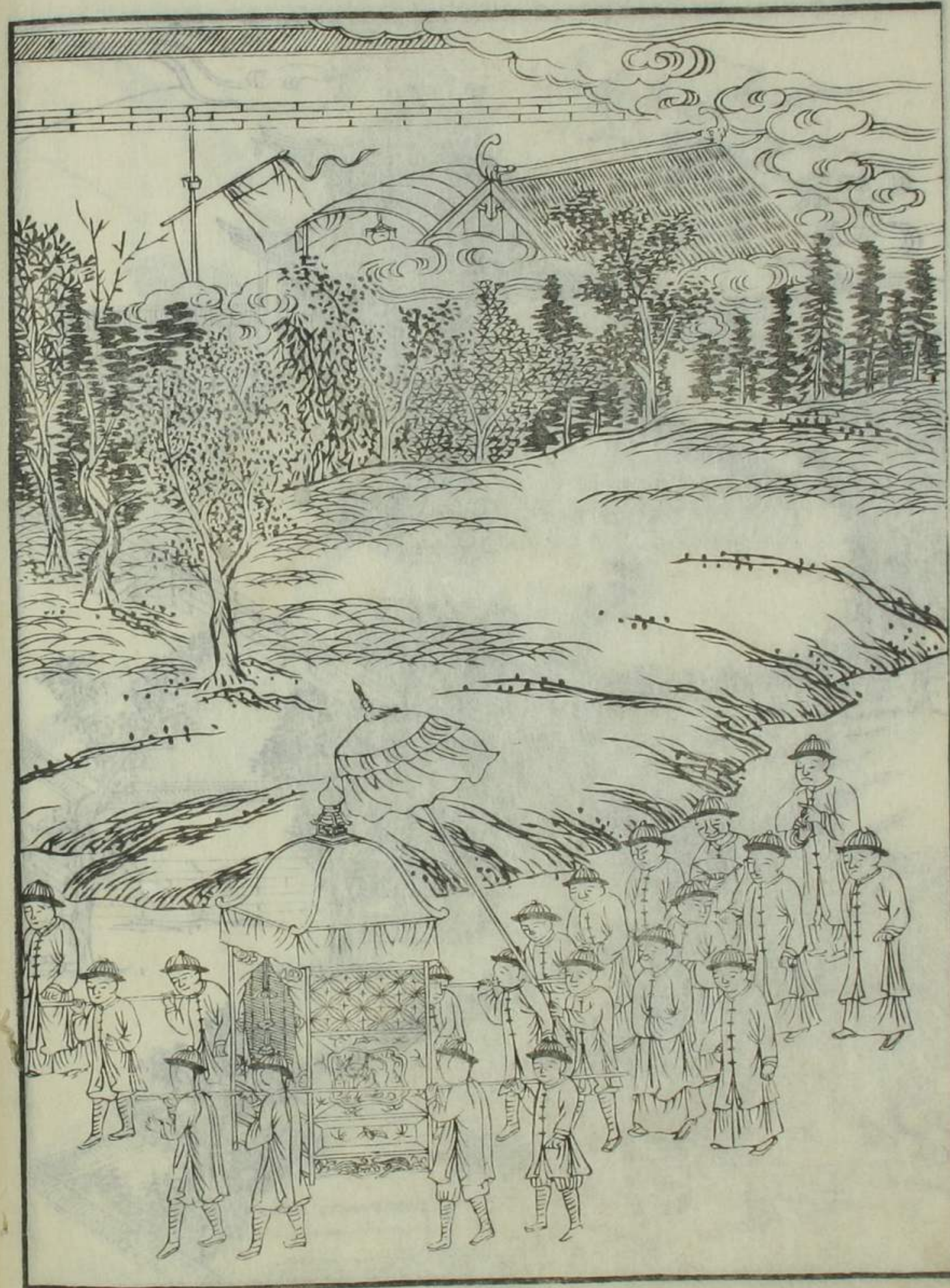
城隍廟

請城隍神郊祀

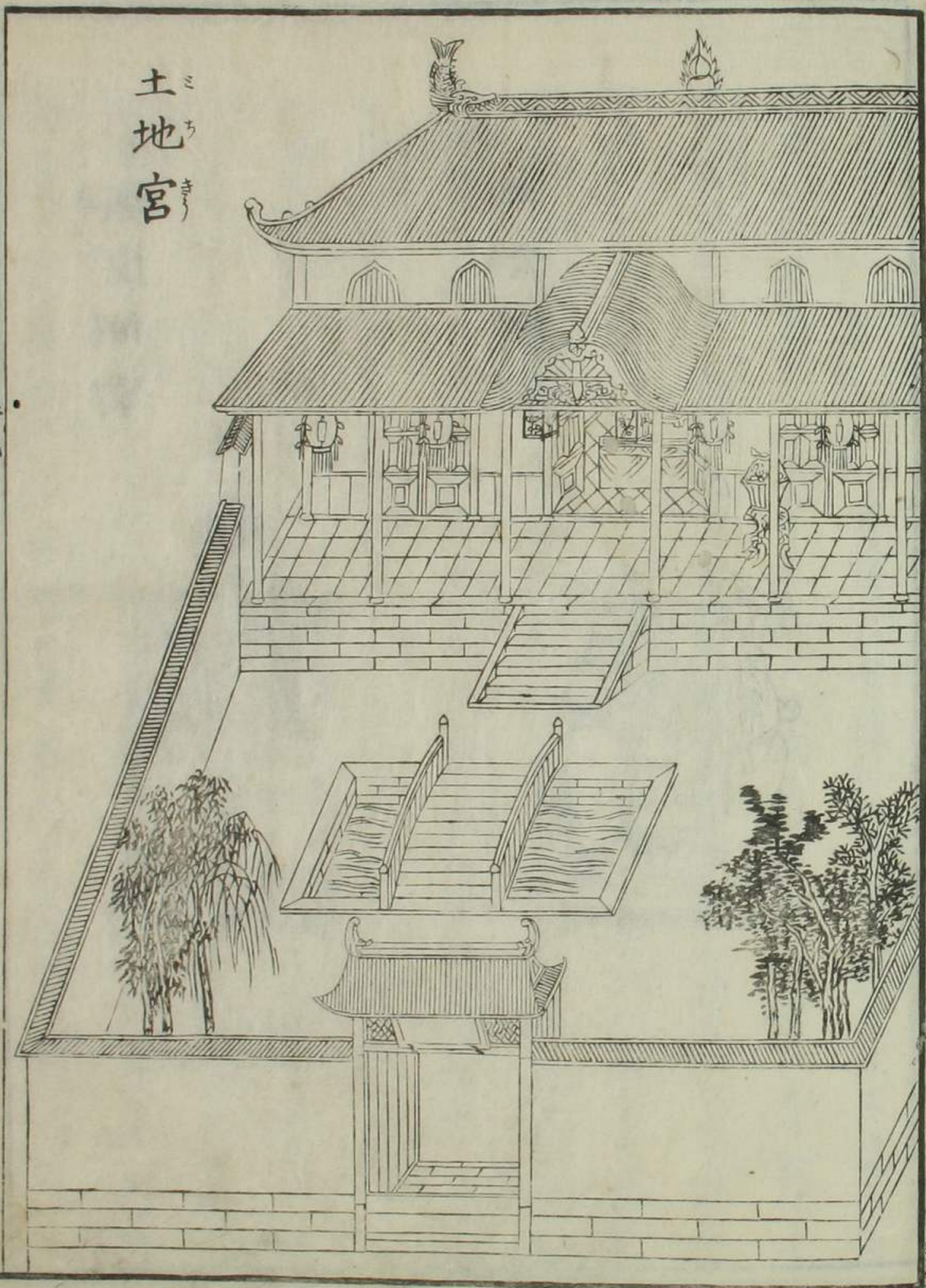


祭礼

上



土地宮



祭礼

土

執事旗鼓涼傘あり道すらく音楽を奏し
樂ハ樂戸司不史何等の樂成
 奏すふとつや庶人智事能事 右三
 度の祭祀ありび母廟一竹年分の供物科香燭科ねい祝官の俸米等
其地の物成み之開銷す城隍の像ハ本あり刻ミ手足二目傾運動はる花
 指(府)別縣の官銜品級み随ひて衣冠を刷ひ並中み泥塑の像も
 唯神主成之銘をむり書ますなり都て神像あり

○土地宮 土地宮ハホテチニシキ 福德正神と稱し土地の守神あり其郷里村落とも土地神祠
土地宮ハ土神の幸也 あり其の内に自家地面の内中を土神祠を造作し安坐し廟宇土地
 の大小よりちて不同あり二月二日聖誕生日よりて祭祀す 神祿何と云ふ
 其洋争は 廟内(三牲供物
 種)種香燭を忌に祠官奠酒礼拜し祭る諸人系諸男女群集守朝廷の
 致祭し此系故官み此もまゝ祠官俸米等の度も以て祭祀香燭等乃
 科の諸人喜捨して祭るし一年分の供科祠官の過活等不足あり

城隍神像



土公神像



○天后聖母

（み天妃と文娘々々々々）

専海上の守護神也宋朝建隆元年三月廿三日福

建興化府湄洲あり誕生あり父と林氏宋初み仕て刺史の官にあり致仕して

後天后誕生あり天后幼少より智恵賢徳人み超十六歳の時道士より道を授

けり修行し二十八歳の年九月重陽白晝に神と化し湄洲の高山より昇天

して世々神靈感應著し信仰祈誓するに應せざるまじり代々の帝王封贈

の勅あり康熙廿三年みありて天后封贈春秋祭祀免許の旨あり湄洲

と聖誕の地あり大なる廟祠を造営し神を安んず其外京師并み諸省府

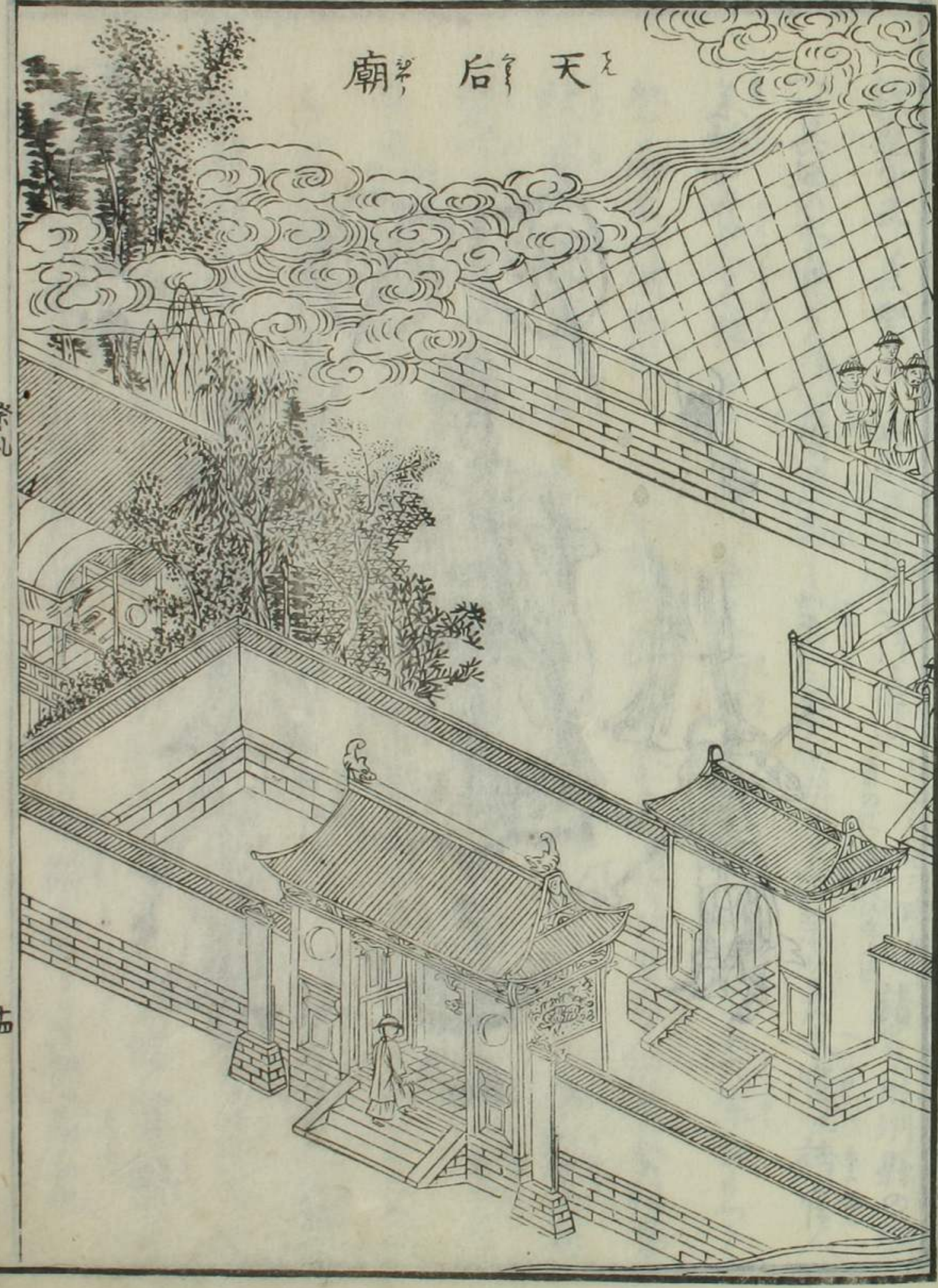
別縣亦み廟あり廟門前に下馬牌を建下馬牌ハ朝廷より祭祀の式ハ大牢

承承を其外種々供物を供へ玉帛香燭を備へ外其地の官員之を兼り

執事人員を支配して司り朝廷より禮部官の内兼祭官より勅命

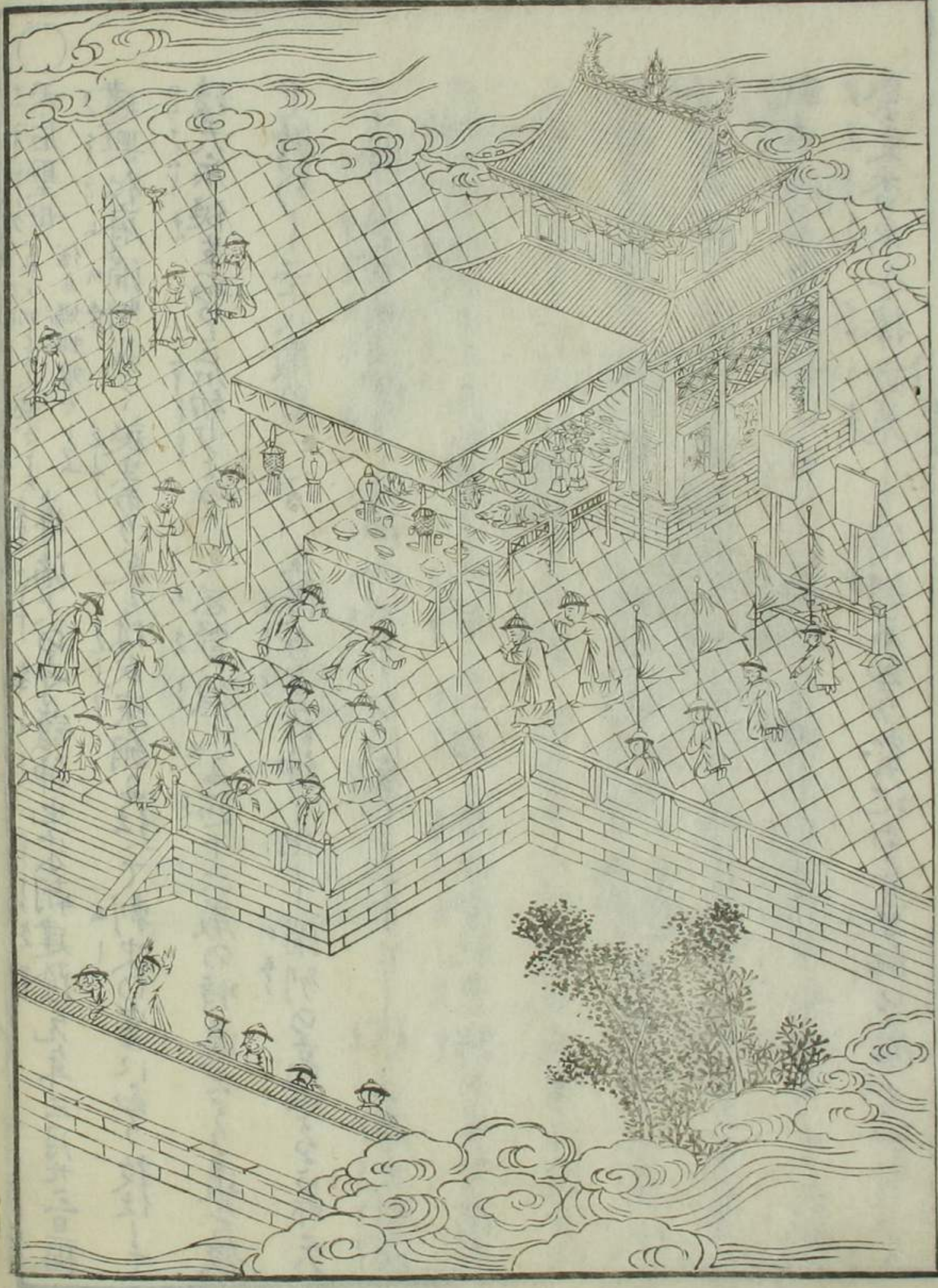
祭文香帛を捧欽差して湄洲みあり祭祀ある京師の廟も亦あり

天 后 廟



祭禮

西



天后聖母像



欽差をきたし祭らしめ天子も氣心洋る天子を始三跪九叩 諸省府州縣の廟 首の礼を行ひます

其地の本官より禮房官(命)祭祀の事を司りしむ祭日み本官并諸官人

系縁止官人系縁年々諸人男女系指群集也本府州縣亦大宰をりし

祭る神祇の供物穀十種香花炮燭鮮明也祭日二月廿三日翌日祭祀春

秋二季の二月八月の上亥日を用由兼祭官等系縁の次第の祭日諸執事人員

齋戒して高日早辰沐浴吉服して廟みおる廟祝燭を点し香を拈し早きて

長官諸官の 頭をツク少中其餘諸官執事列班す正席 贊禮官 各方 三跪九叩 首起坐の式を唱

ふに傳ひ諸官礼を行ひ讀祝官祭文を讀みす祭文の時不 値ひゆる也 諸官群年て退散す

を其地の保甲命して諸人の日用争闘を裁すナラコト 罪ヲテ祭日おる高家飯田民を施主として

做戲を催し廟門外の廣苑場を戲臺を設け做戲を献す系指の諸人音戲もて

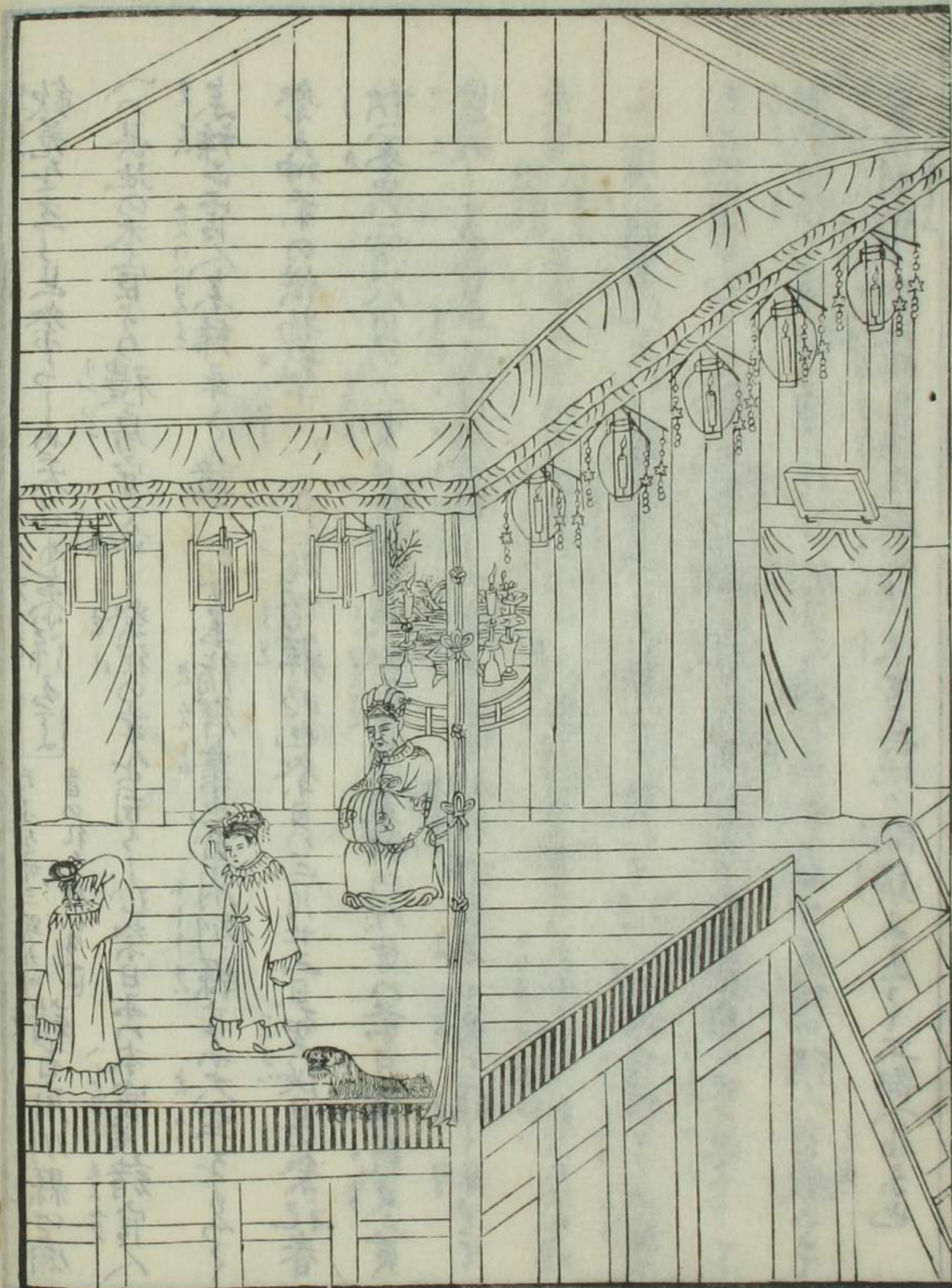
登殿開動す祭祀科香燭科廟祝俸米等其地の開銷み多し工部(田家也)

戲臺



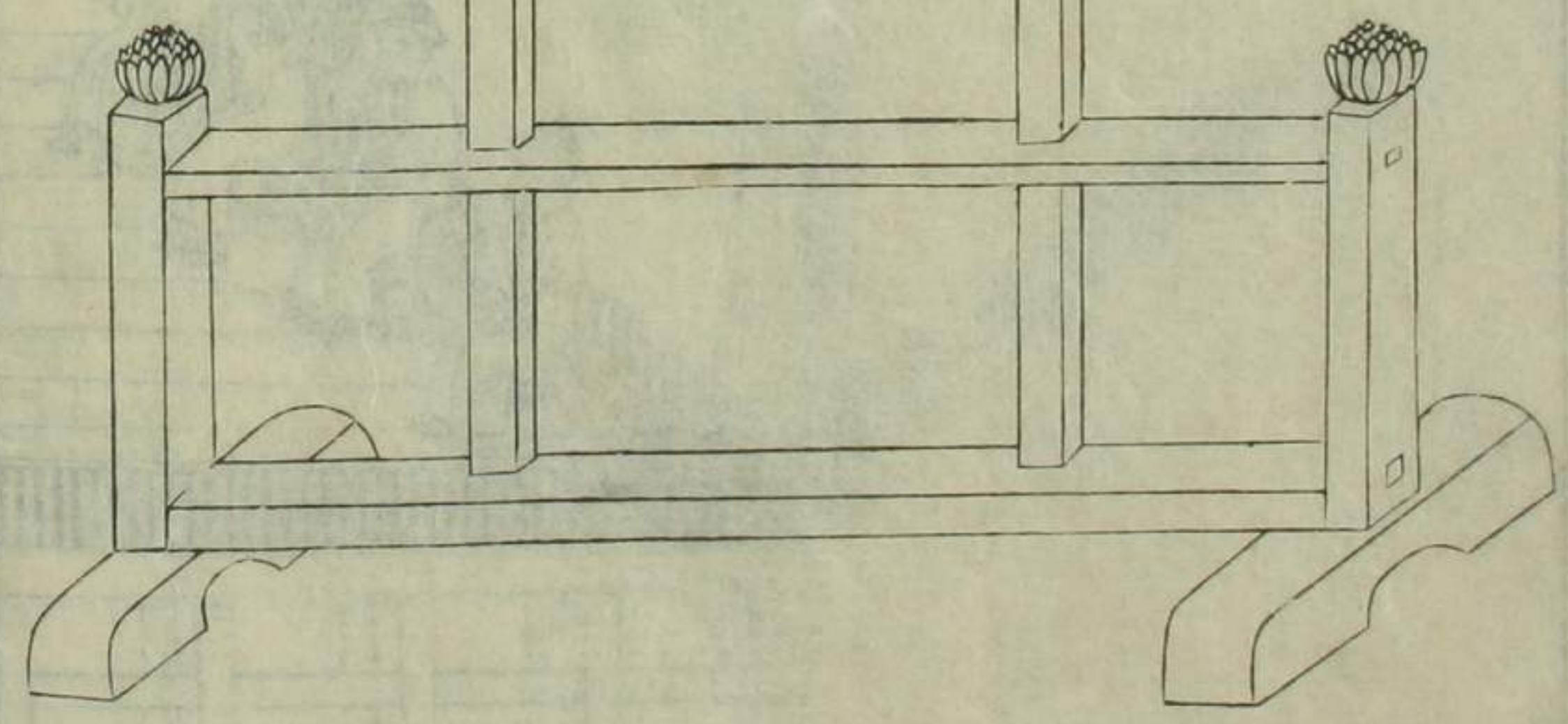
祭礼

十六



天后聖母

奉 春秋祭祀 旨



○關帝（一不關聖帝君之廟老幼皆關菩薩ともあり）

武運のち獲神して威感感靈並著し軍率るに折挫して

恣に（たゞ）武官（ふん）の勿論（もちろん）十外官民信仰する故他の神（かみ）亦諸省府州縣（しよん）に廟を建安

至す武廟と唱（な）御里村落の庶人（しよじん）も亦信仰せし（し）雍正年中（ようせい）に産湾の賊徒起りて

靈驗ありて速み平靖せし故靈佑大帝と加封す春秋祭祀免格也廟門外（まがら）下馬牌を

大軍を以て参り参り日（ひ）五月廿二日歸天（きん）の日を定祭日とす春秋二祭（し）二月八月上戊

日を用官祭祭年（とし）て清人善信す男女を極（きん）せしむ做戲（しやくぎ）を献する事（こと）亦祭式祭科（し）も八開

銷（しょう）の棗（そう）は天后廟（てん）同（どう）○天后廟（てん）閉廟（び）たみ靈載（れい）と云物（もの）一（ひと）み簾（せん）子（こ）本或ハ竹（たけ）を以て札

を（を）佐（たす）る（たす）百枚（ひやくまい）一（ひと）百（ひやく）と番（ばん）を（を）て箱（はこ）に（に）収（と）め（め）て吉凶禍福（きちうくわふく）を（を）ら（ら）ふ

別（べつ）み（み）其（その）番（ばん）之（の）所（ところ）れ（れ）吉凶禍福（きちうくわふく）を示（し）したる神（かみ）陀（だ）を詩句（し）み綴（つ）りて書記（し）したる板

及（およ）び（び）氣（き）を籤訣牌（せん）といふ籤（せん）を振（ふ）出す番（ばん）之（の）を認（たづ）む籤訣牌（せん）の番（ばん）之（の）一行（いっ）み比

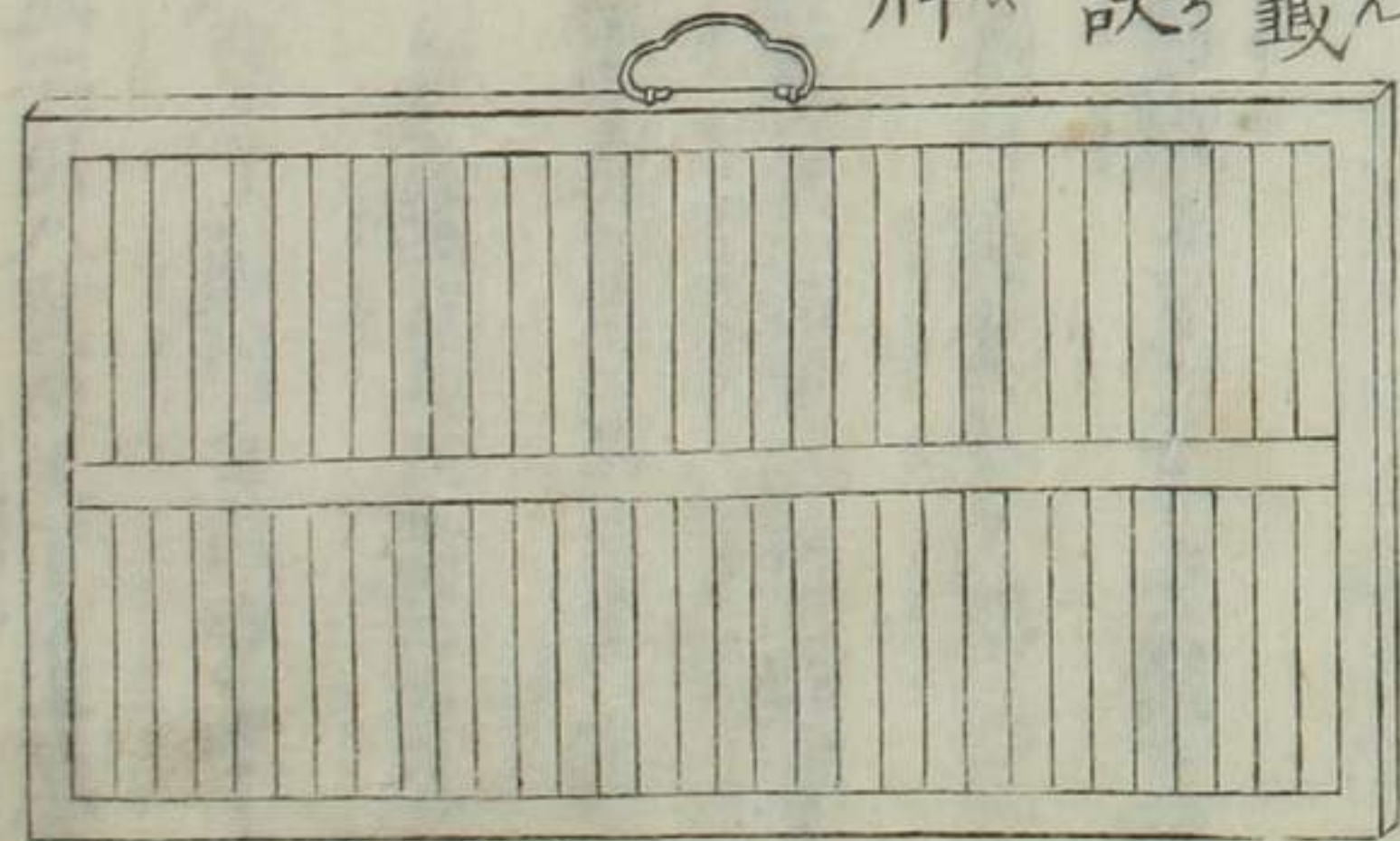
へ（へ）合（あ）ふ吉凶禍福（きちうくわふく）の意（い）を（を）知（し）ら（ら）る

關聖帝像

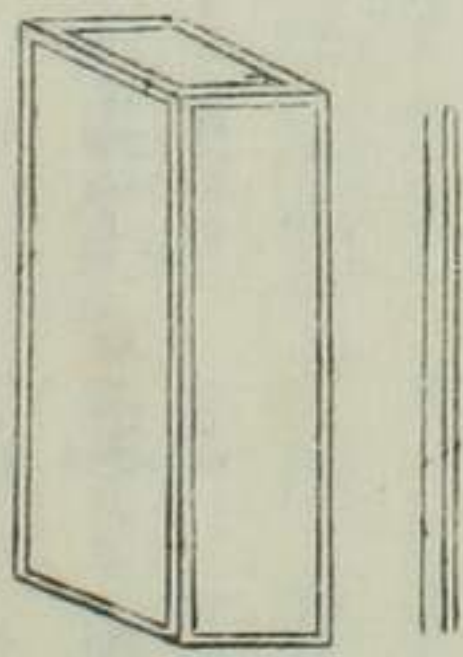


祭礼

籤訣牌

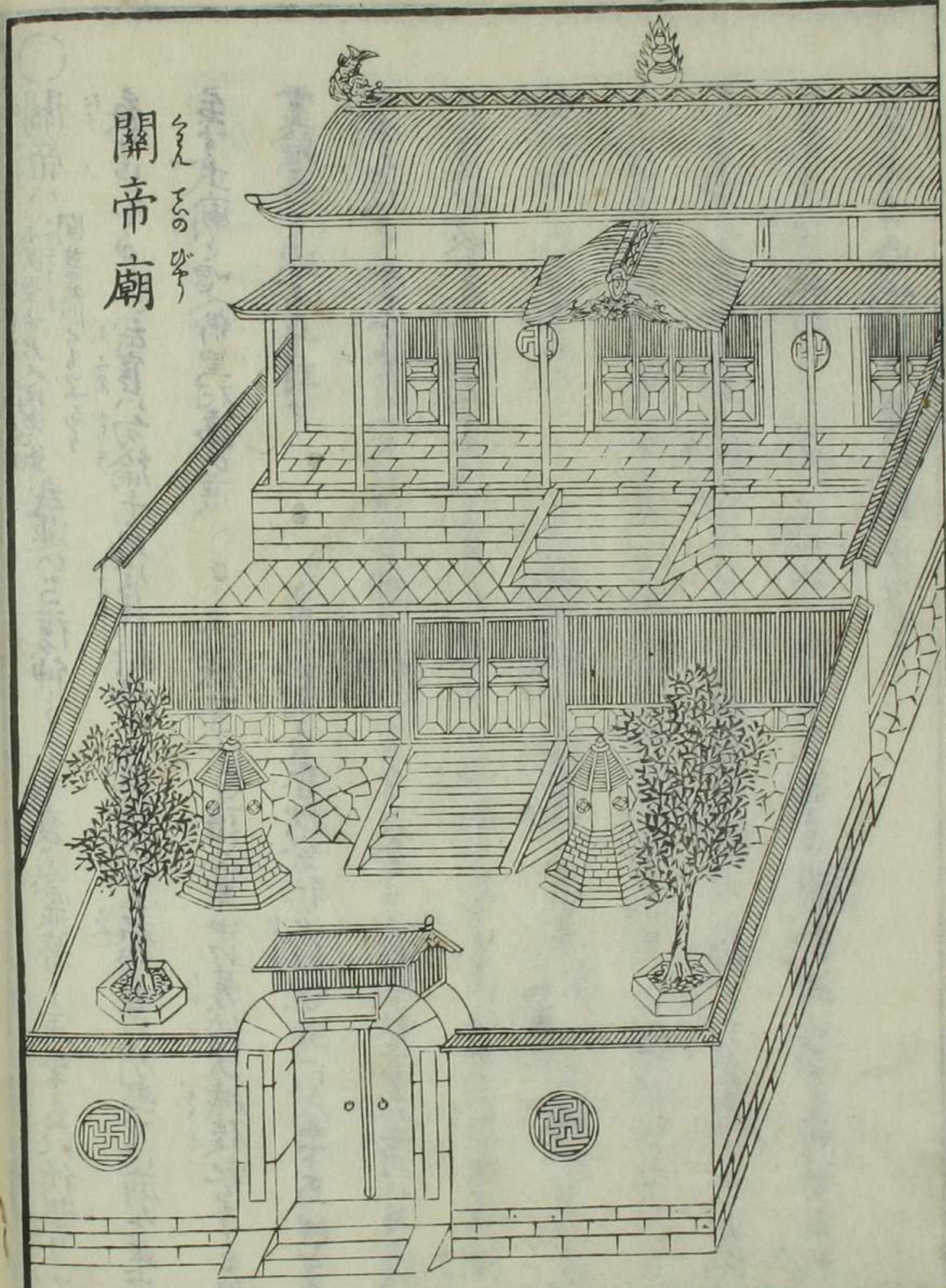


靈籤



六

關帝廟



清俗紀聞卷之十二

○孔廟一ノ文系師希諸省府州縣亦廟を建二月八月の上丁日祭奠の祭祀あり廟門下馬牌を建官員其外庶人あて通行せば祭事すら系師の廟へ欽差を命し致祭あり天子系拜しる小諸省の其地の官府預を支配して司か系水の節と天子の外の其地の長官とも丹墀の上に登りて奉りて丹墀の下に拜しる蓋蓋蓋豆泥泚の草類蕪菜の毛鼓樂初獻亞獻終獻等の半に祭酒先生并に諸秀才の輩はと免三跪九叩首等の禮式ありもも庶人妾女窺探しる事を得ざれば詳細知事あり也大廟の圖同學部に存也

清俗紀聞卷之十三

僧徒

○唐山と禪宗律宗天台宗あらび道家好り律宗天台宗を至す少し総して僧侶の天子とも石小ありされば絶て朝廷にあらず一依る文武官めとりての格式をも好く官とも領地等苑行も事もあらず官とりて田地を寄附の事も至る稀なる古今の知識も又も住持めく官はも格別法位仰の僧あり居入せる時も水遠香白華の助とて田園等寄附せる事あり大伽藍を一山小付く山田地等あり其外檀越の官人富家豪民も喜捨とて金銀ありび田畑茶園等送らず事あり月と大伽藍衆多し僧とも事足らず寺院の境界も石めく造らず榜示あり自是東西南北某寺境界

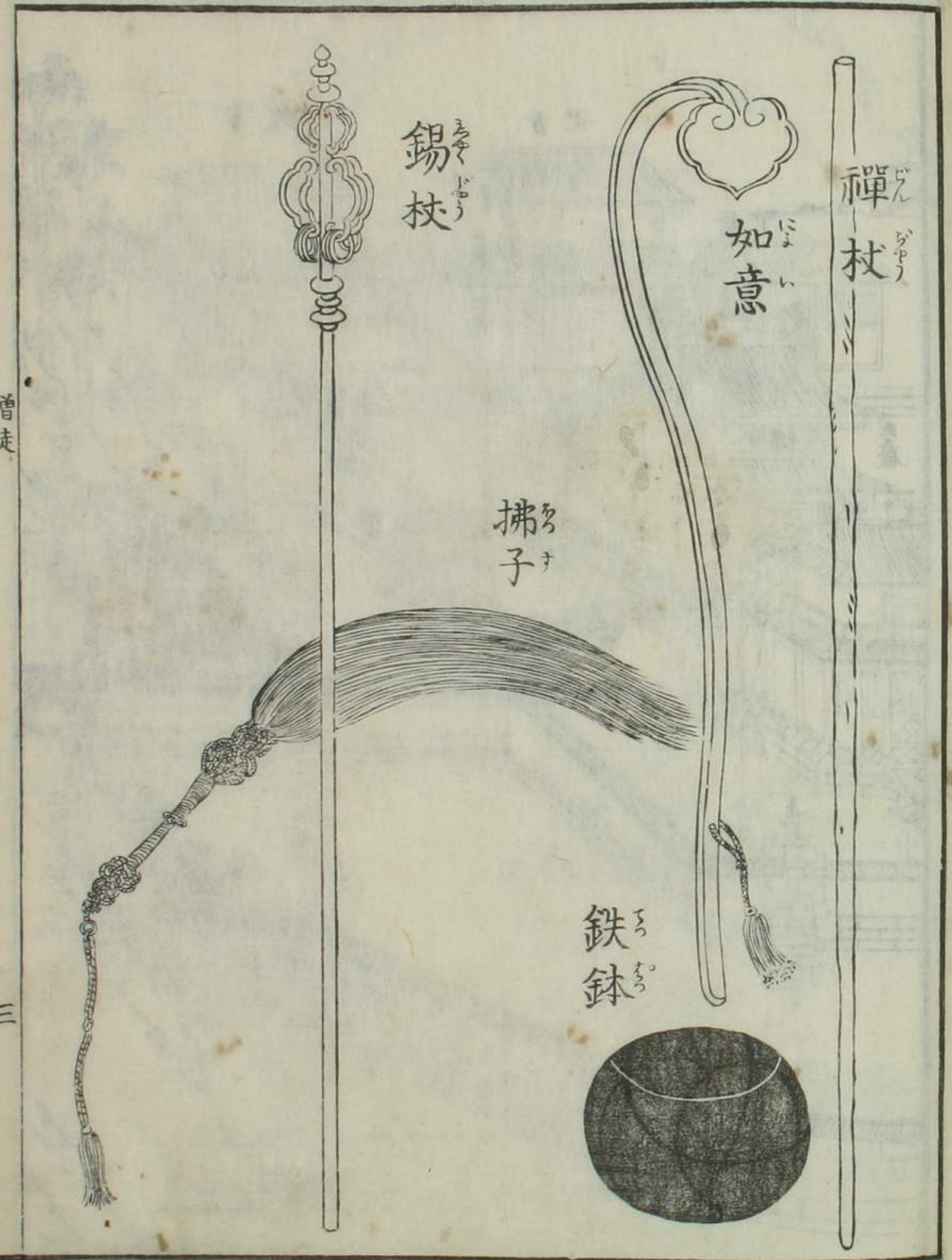
僧徒

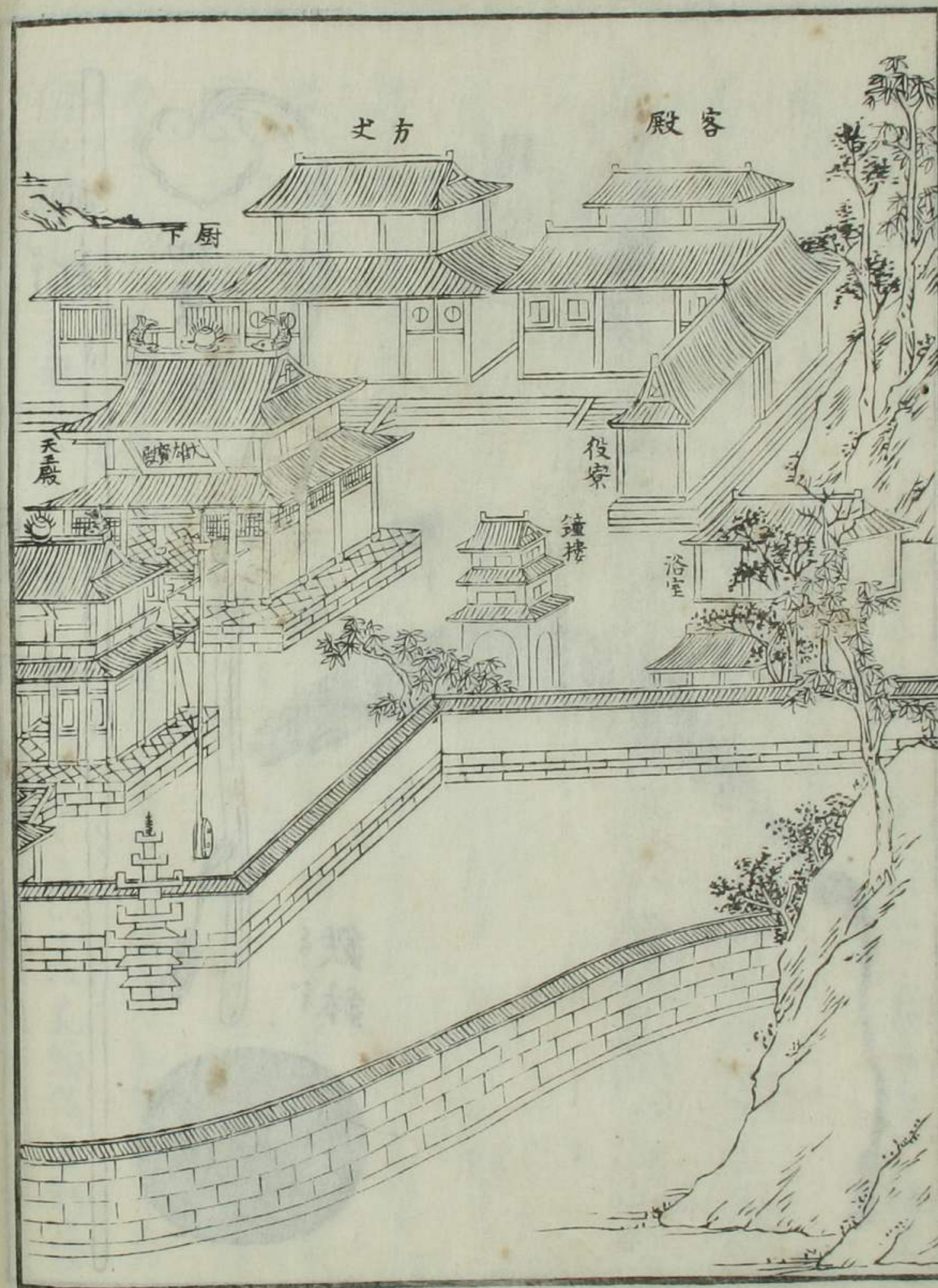
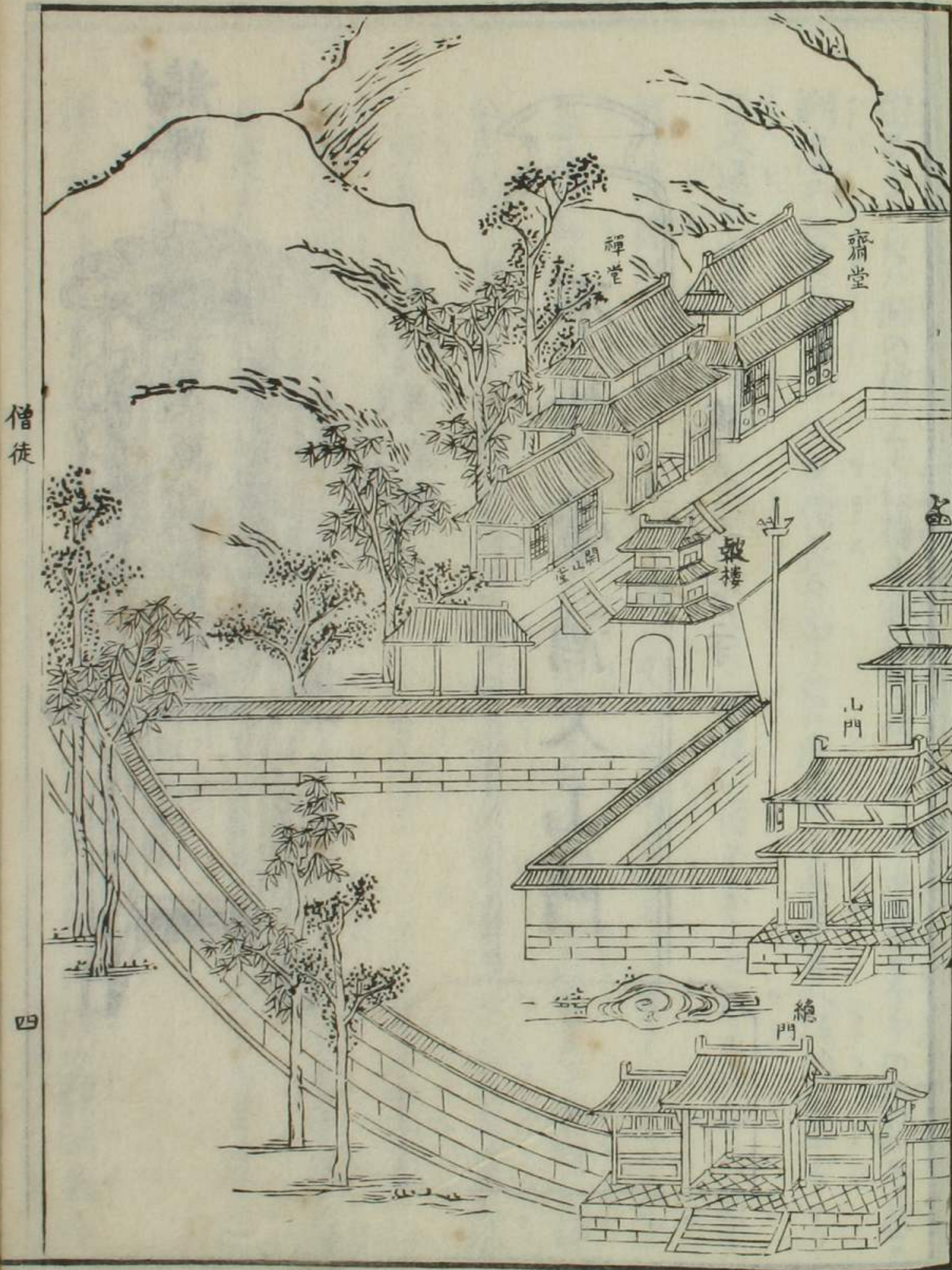
や去記して之を重なり奉山末寺等の制あり大寺あり小の地名成山号に有る
寺成存寺と云碑之ハ普陀山觀音寺ハ奉山中ハ其山中ハ其山の寺ハ末寺也
一山の諸誓と其奉寺ハ預り奉りあり大寺ハ住持の外首座都寺監寺典座知
客副寺等ハ重なるハ後僧ありハ老僧ありハ世を味又ハ病者等
みく勤めたる僧ハ銀子成納免勤免免
過ふもあり首座都寺以下ハ後僧と寺法ゆく分るハ各目ありハ寺内より
の品級あり此方ハ僧正檀林ありハ官位且紅衣紫衣觸頭獨攬此
格式ともれハ隨從ハ官人の志ハ車轎ハ格式ありハ
あく多るハ老僧ありハ病者ありハ遠行ハ轎ハありハ
歩行の時ハ侍者一二人の外僕を連るハ稀ありハ中後僧ハ時ハ習代
まハ勤め成見ハ住持ハ昇降成あり且僧隨身の品ハ如意拂

○子禪杖鉄鉢にかた僧の奴僕とてハ奉り
寺院の構宮々大門二の門天王殿奉堂禪堂開山堂鐘樓鼓樓齋堂
浴室方丈客殿後寮厨下等あり都一室定別楹ハ建ハ後寮齋堂浴
室等ハ楹の内ゆく仕切あり且梁間等ハ定もれハ大門外ハ不許葦
酒入山門と記ハ石牌を立並奉定法あり大門ハ何ハ禪寺とハ
額成奉堂ハ大雄寶殿と書ハ額成奉外殊額等ハ文字ハ
定法ハ勅額給賜の寺ハ二の門或ハ奉堂の内ハ六門ハ勅額を并
奉ハ下馬牌等ハ奉ハ大門左右ハ金剛二の門左右前後ハ四天
王ハ彌勒菩薩正面の後ハ韋駄天尊を安置奉堂の奉ハ釋迦ハ
兩側ハ羅漢を安置奉ハ前ハ皇帝萬歲萬歲と書ハ石牌を
立並奉龍牌とハ此龍牌ハ寺院毎ハ奉奉定法あり官ハ由迎ハ

僧徒

多く別み朝廷より免許し奉事ありては寺法めく至事なるに依り
 龍牌の供料とて朝廷より寄附給賜等此事あり
 天子皇后より龍牌(上使等)朱指の奉事あり天子位牌紳主等之
 並みありて其石の官人年頭みずる寺院へ朱指し此龍牌を拜せ
 ると朝廷へ拜賀す奉事あり
 天下の寺院を統領するは禮部の官なり諸筋等(其末)知縣中
 へ知縣より寺院へ達し僧侶の諸筋より破戒不如法の僧尼方等此事知
 縣中知縣へ知縣より裁判し輕重事(知縣)切りて執りて其重事奉事あり上
 司(中達)禮部(伺ひの上)取らばなり多し一山限り寺院の通執行(脱衣)の扱
 ありて形止も詳め奉事能らば度牒を寺院の任持より知縣へ願出せば
 聞解れ上至り知縣衙門みわたり渡りて兼く五枚十枚免頭符(五)剃度の





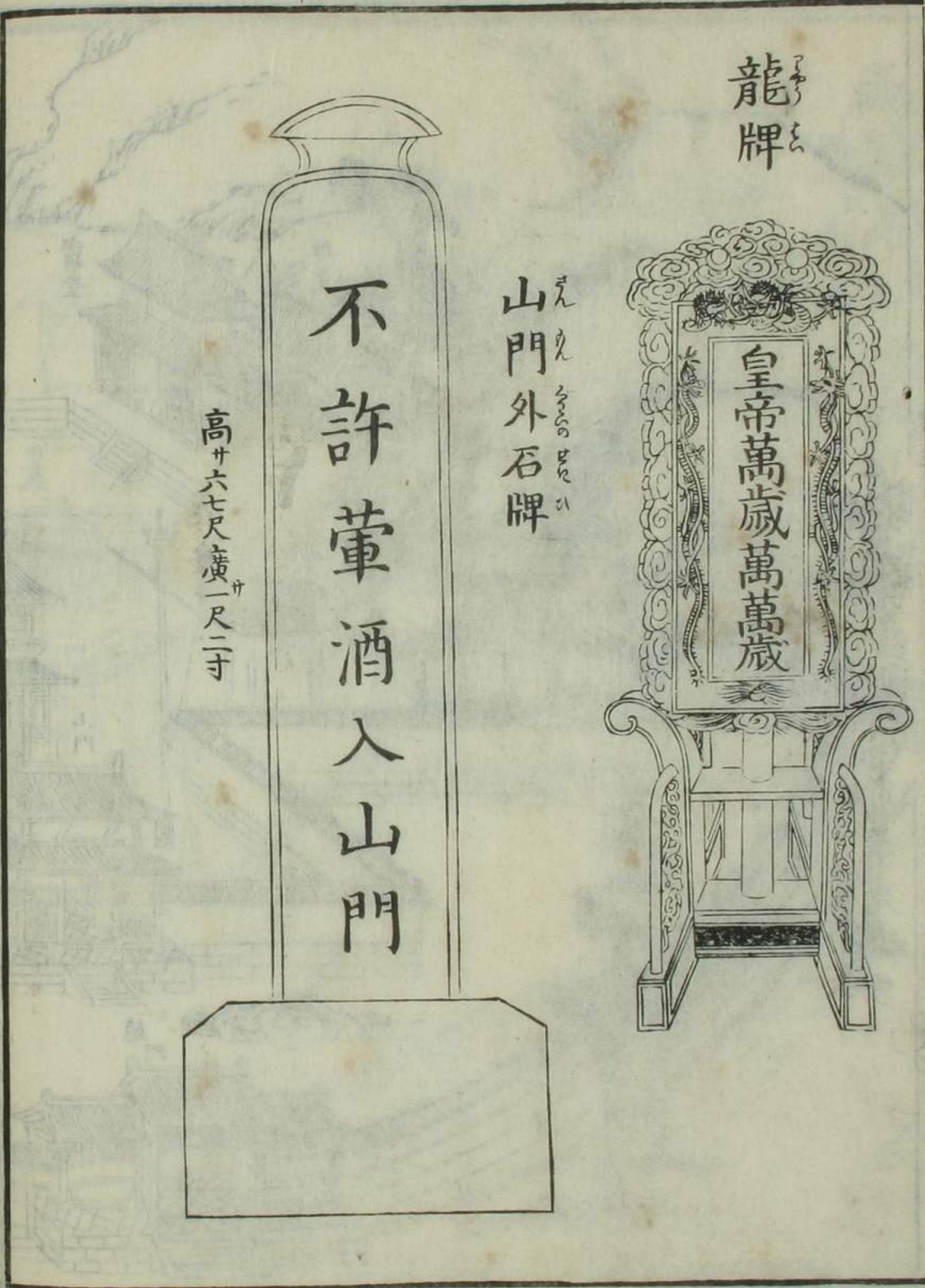
龍牌



山門外石碑

不許葷酒入山門

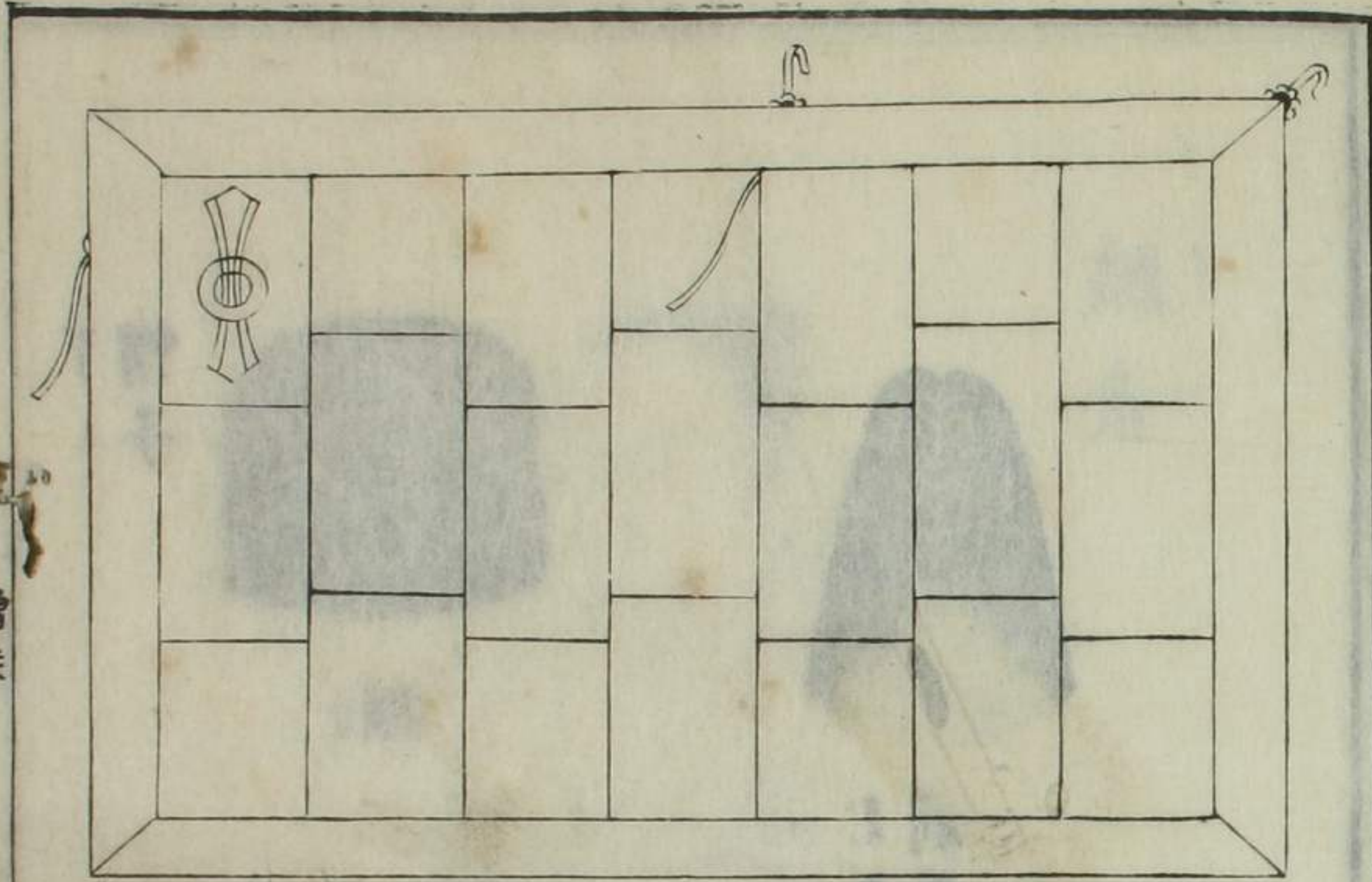
高廿六尺廣一尺二寸



僧あふとる師の僧を住持に顔出乞請ふるに度牒年分の定数ありて
 剃度の人定数等か一旦僧死をむるに度牒を其年寺へ返納を存寺より
 官返を事なく存寺に届くると剃度の僧あふとる名を成切之流す
 然り度牒代式を官府より僧家の之取扱ふ事なく兼て見及ふ事
 あり不ふ事ありて ○僧家の田地を都て僧に支配ありても民へ給
 の支配少寺院の田園を民へ貸耕化せしめ年貢を収むる年貢未進
 不納等ありて不給懸之顔出裁判ありて菜園中々人吏を雇ひ行化せしむ
 新法邪教ありて僧中中兵器及物を蓄する事へ制禁せしむる寺院を標
 識建てる事ありてありて寺院の敷地を官に建留ありてありて建之の
 土地の其地の知縣ありて其の國海の之造宮に
 禪宗に法衣袈裟衣を着し 此方のクワと 袈裟の錦縹綿紗綾の類法衣を

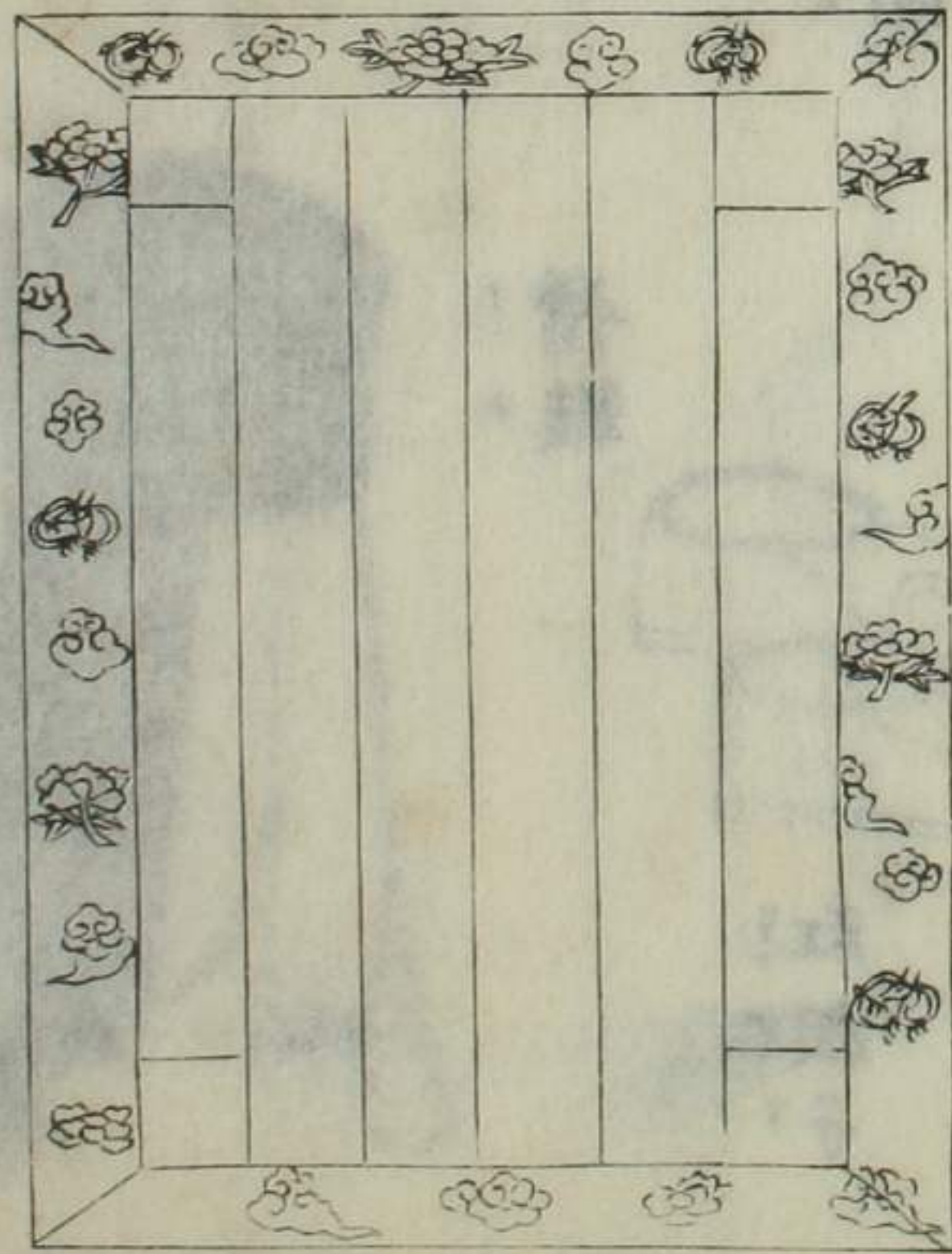
僧徒

僧徒

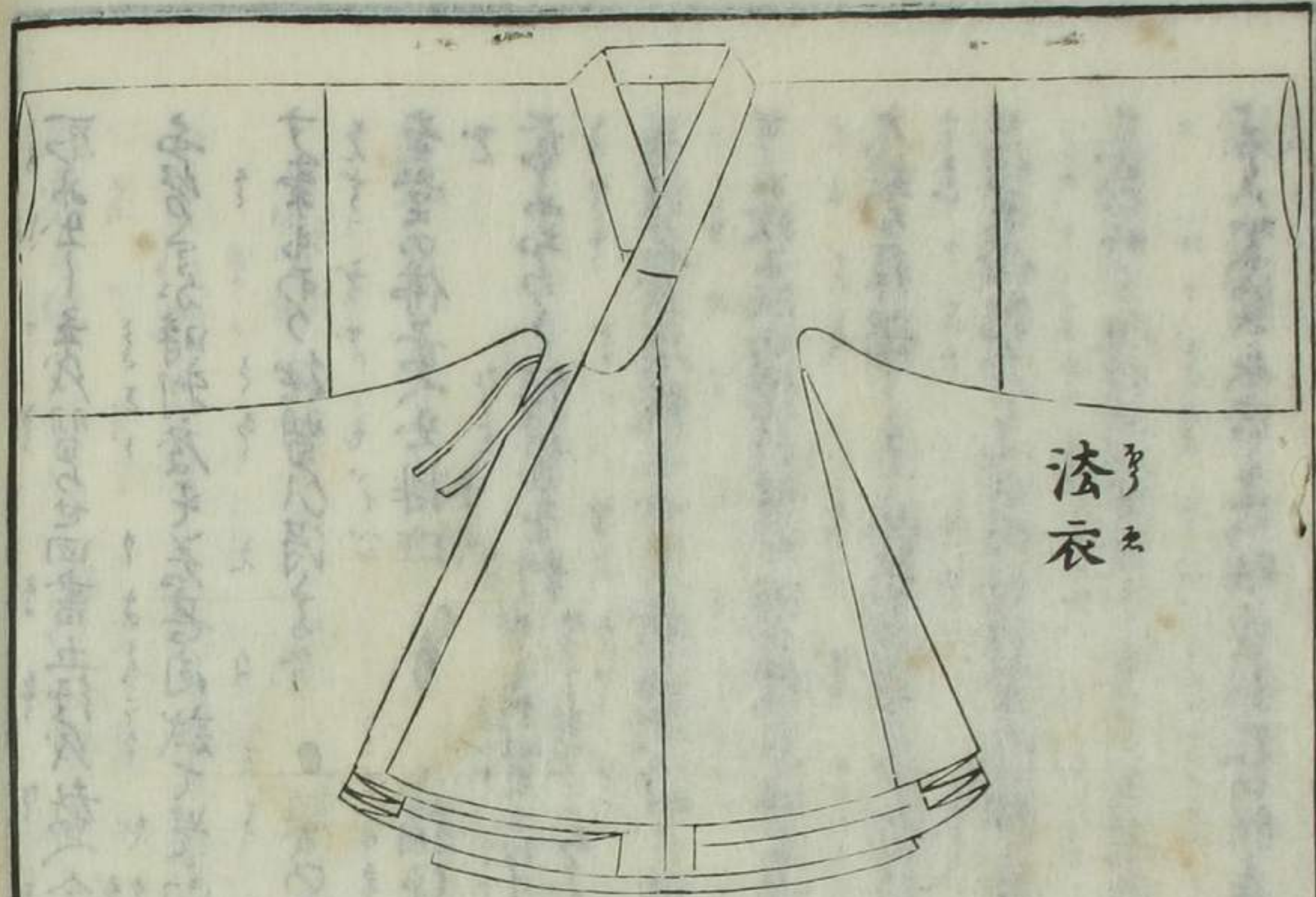


袈裟けさ

座具ざぐ



七



法衣ほふえ



衣服いふく

總角すんかく



前面ぜんめん

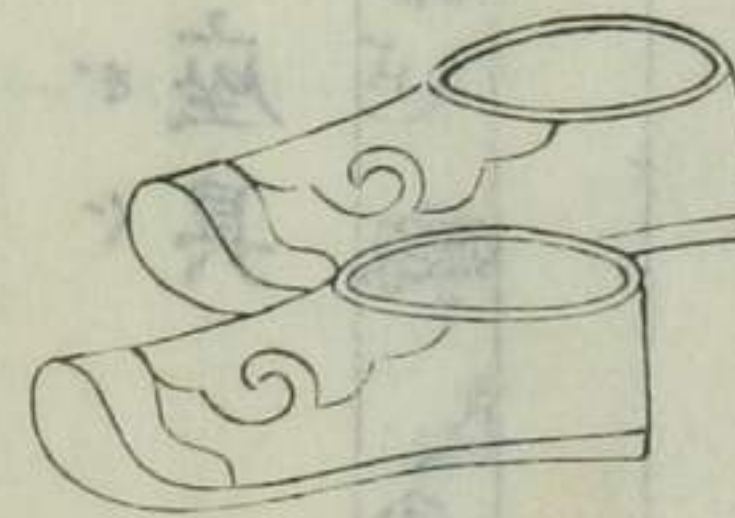


帽子ぼうし

横よこ

袈裟けさ

僧鞋そうげ



白しろ 絲いと

紅べに 緞とん 子こ



誌公巾しこうきん

小沙彌



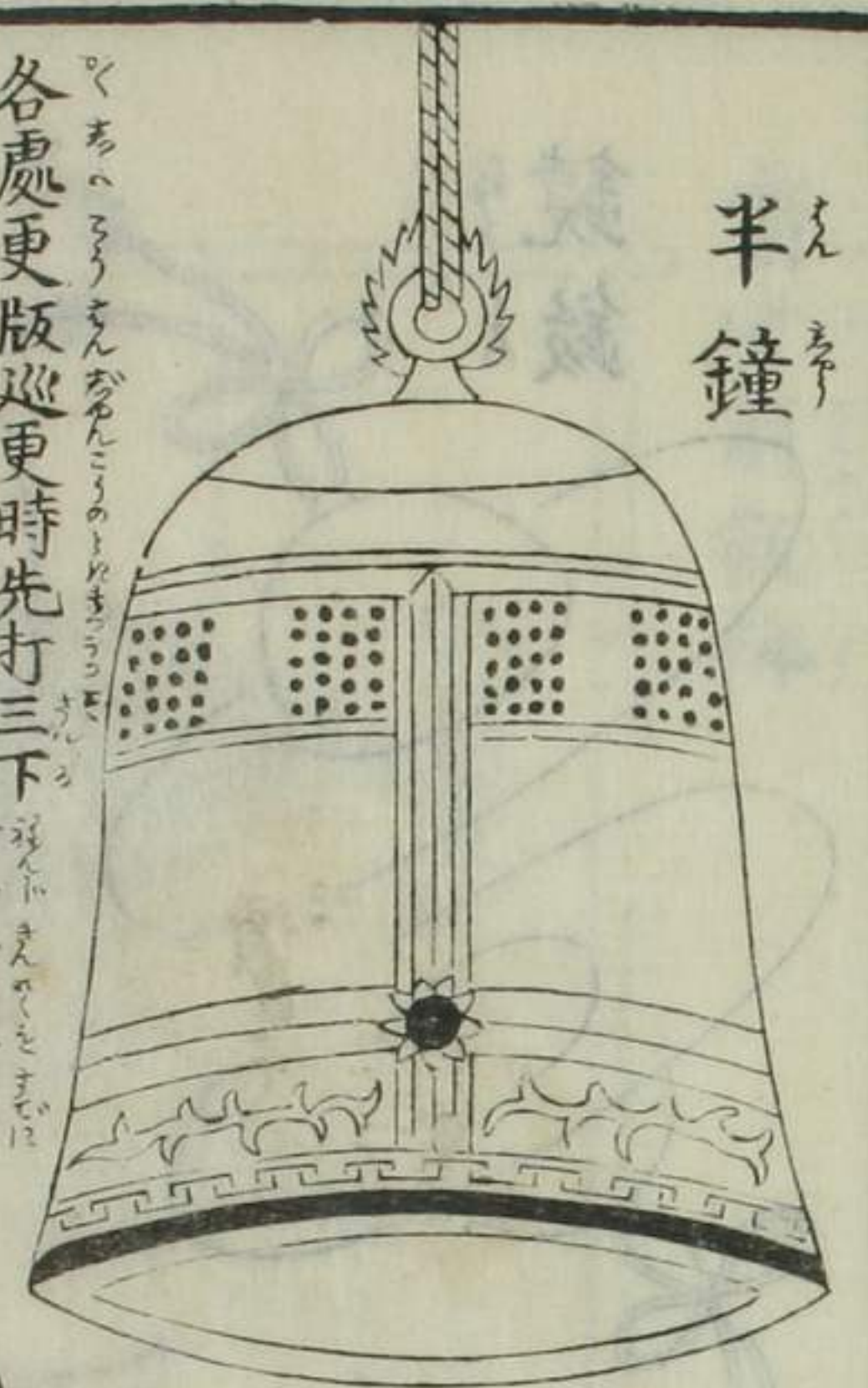
座禪間念佛經等の勤學を多しむ年若の内は小沙彌と号す諸事
 一切の勤めを巡照とて役僧とて夜不寝を勤め夜中木魚を敲き
 無常迅速一心念佛南無阿彌陀佛と唱へ寺中夜巡り一更毎に本堂ありて
 禪堂に掛たる更版とて夜を叩き此夜に書りて之を寫すみ讀諸寮に筋
 五更の更版を叩けば日鐘司鼓とて役僧鐘樓鼓樓に登り鐘を撞大鼓を叩
 其内殿司の役僧は燈明を點し香花を供へ打掃潔淨を年止むに役半鐘と
 亦半鐘を聞く首座以下寺中の僧徒らに本堂に集り誦經始り大衆の内より
 一人大木魚一人銅磬を鳴り年若僧より小磬小鏡鼓を鼓成鳴り誦經の内
 住持提爐を持佛殿並み皇帝の龍牌及靈廟其外諸佛拈香一方丈一喝を
 明方小誦經畢してまゝの寮に入曲座の役僧は齋堂の茶み飯柳とて魚の形に楯
 高掛るる代叩き又雲版とて物代叩けば住持代始り首座以下僧徒の序々

寮の僧引磬を打齋堂に集りて位に於て誦經一齋厨に吃し早に之の寮に入り座禪修學を修め慈を起し又托鉢を乞ふあり昼七時めを本堂に掛るゝか半鐘を叩けば朝のおと諸僧集りて誦經夜一更めを鐘樓の大鐘を叩けば二更の更版を聞て座禪を止め休息の佛不供物ら毎朝菜羹點下飯の初徳成供は朔日十五日の菓子野菜類四時宛供ふ事定式あり法會執行の時ハ多少を定むるか

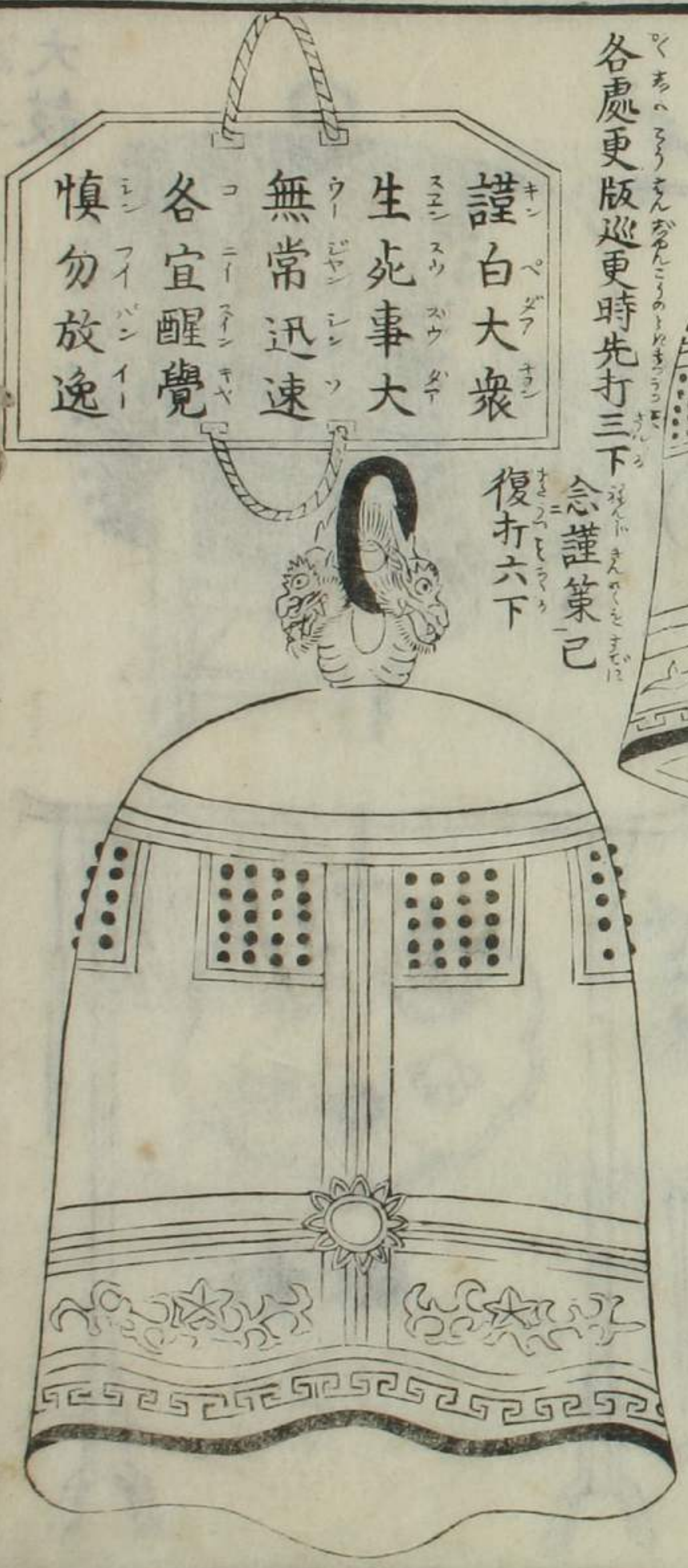
○ 昼夜寺院の鐘を朝七時昼七時夜五時此三度より外時刻を告ふ事あり

○ 出世成志の僧は遊方僧を諸國を巡り知識を尋ね其寺に掛錫し重く座禪問答成修を此向修行者より修行進之を悟り大道を開け其類を知識を乞ふ師と侍り先師の事を受業師と唱ふ行者の間々中切の有發を修行專あり此修行の内より多く名僧出たり

半鐘



大鐘



謹白大衆
生死事大
無常迅速
各宜醒覺
慎勿放逸

各處更版巡更時先打三下
念謹策已
復打六下

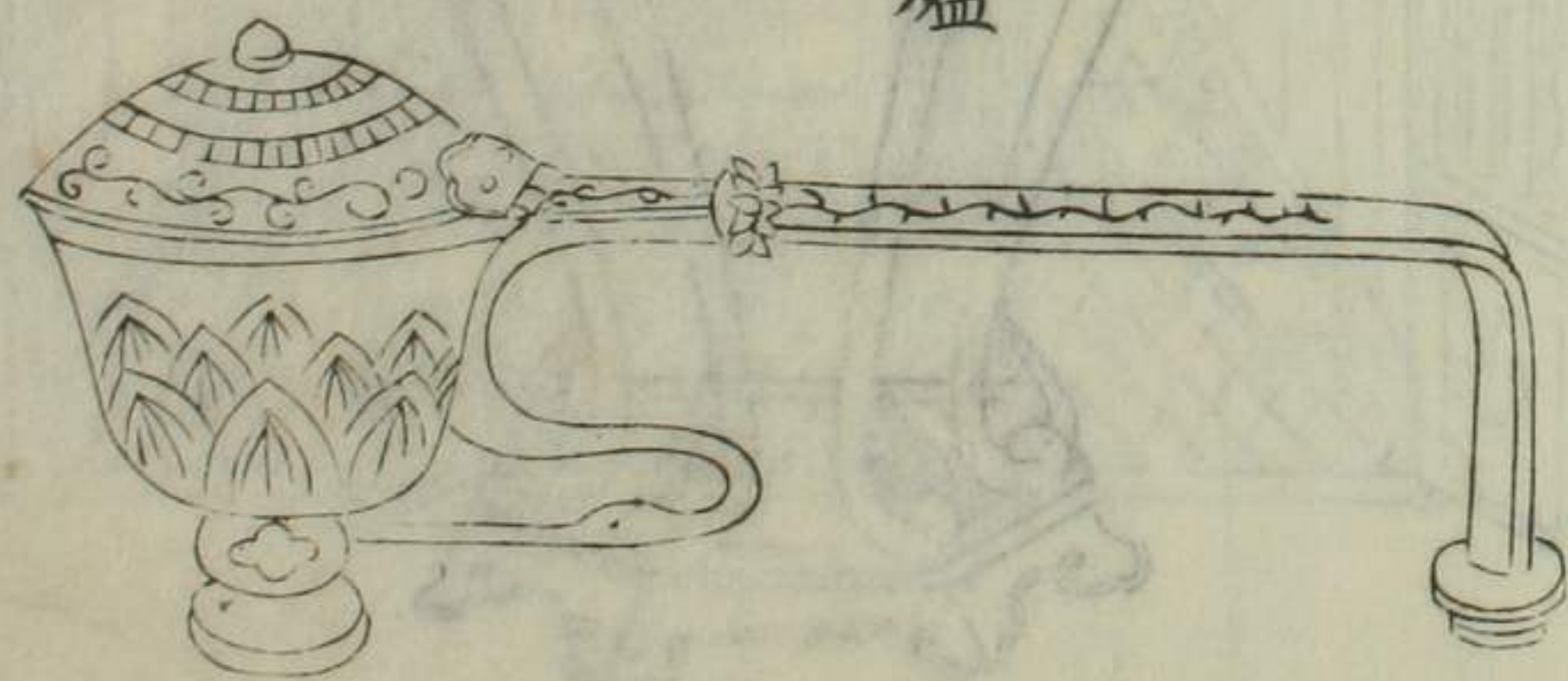
僧徒

十

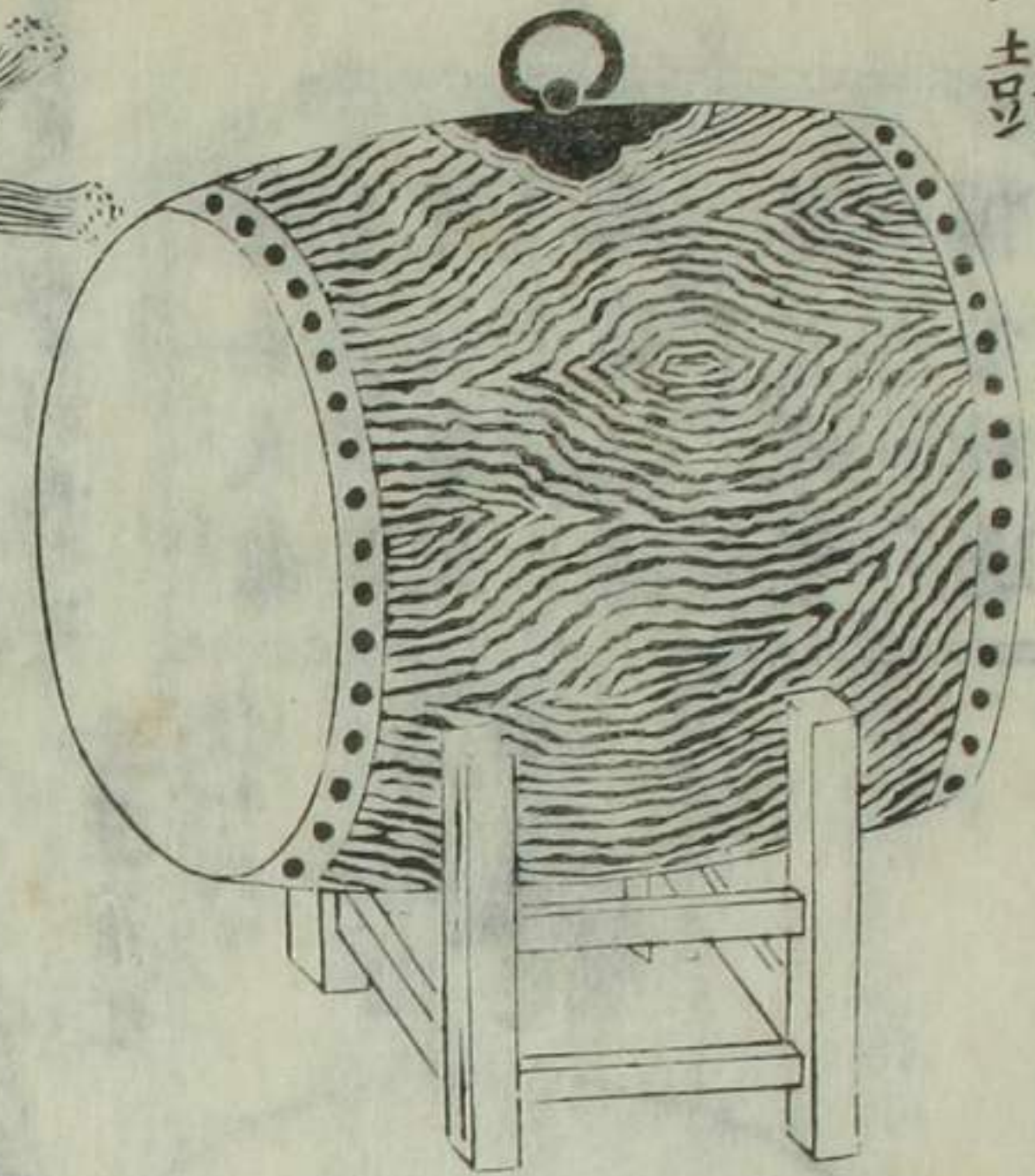


齋堂前飯柳

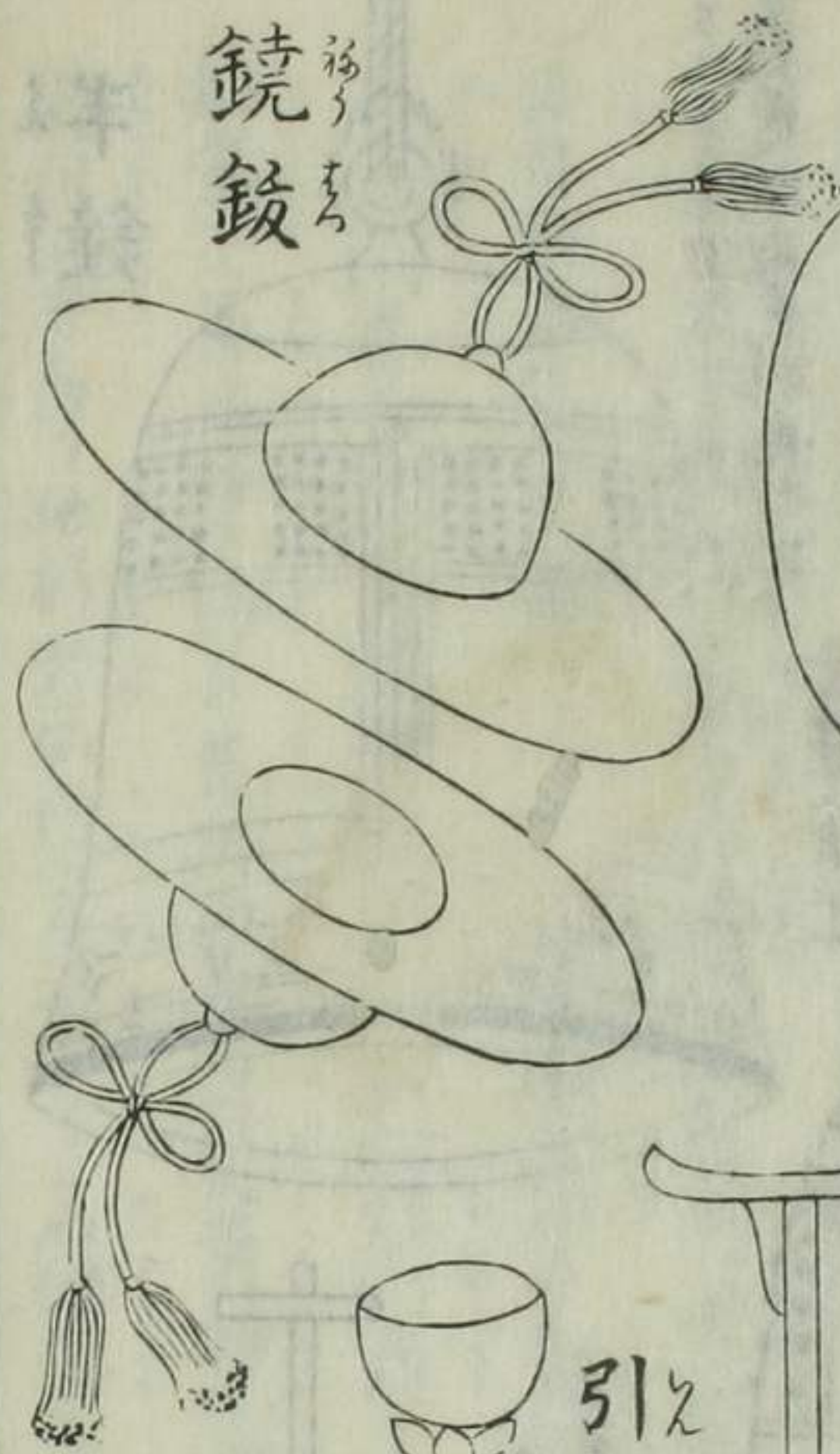
柄香爐



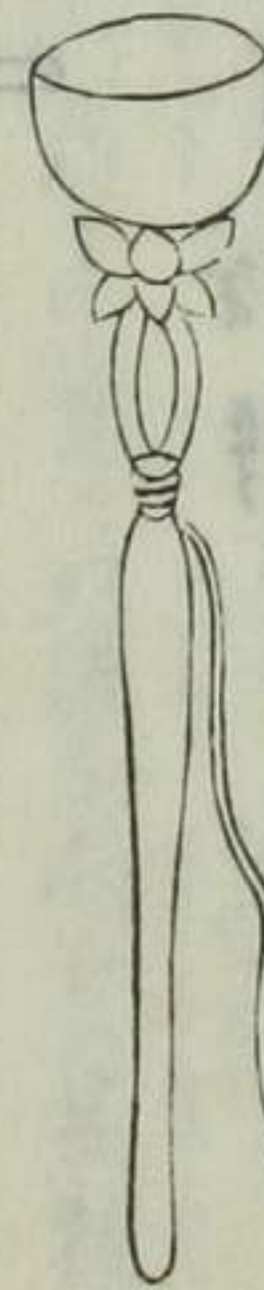
大鼓



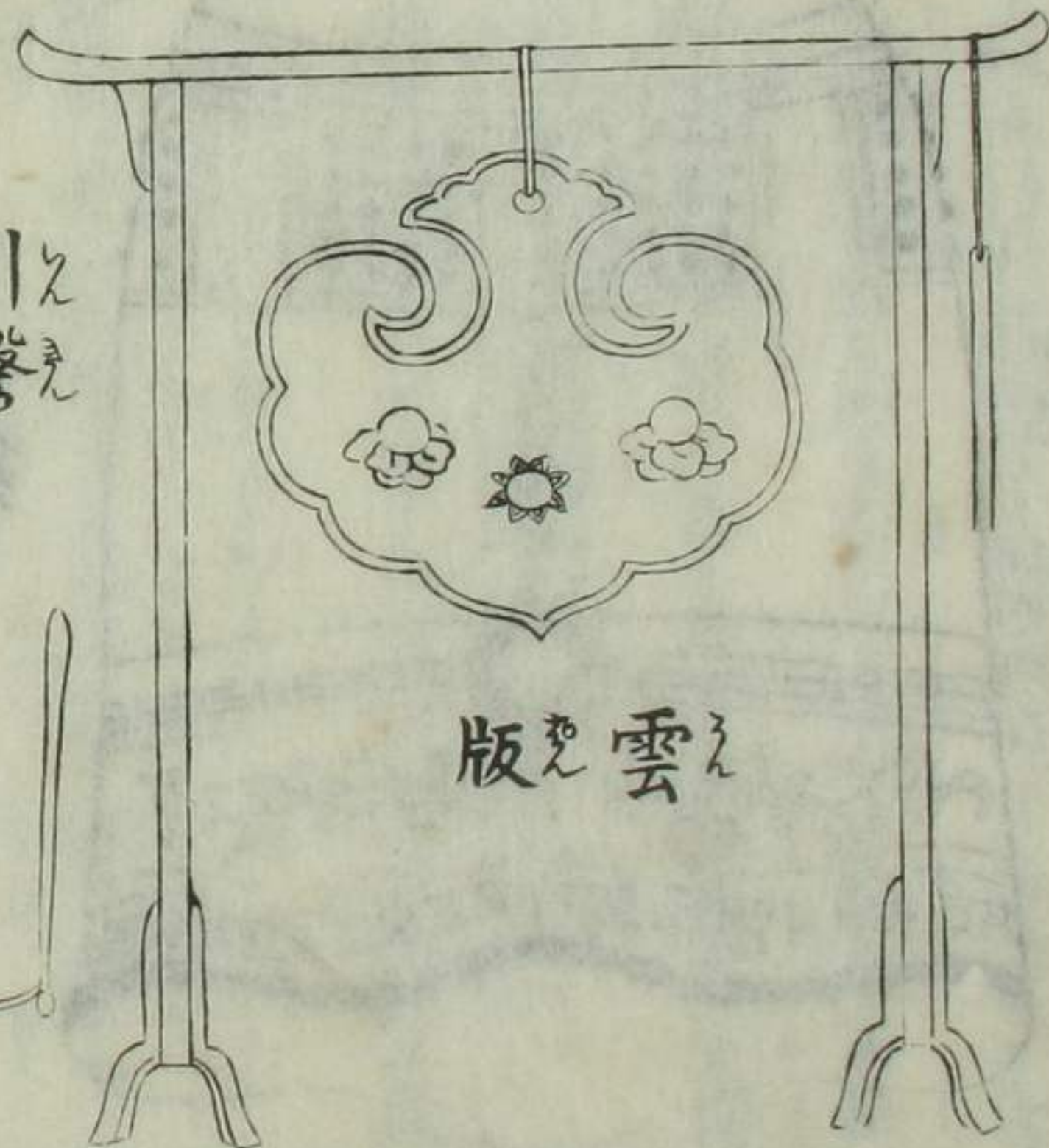
鏡鉸



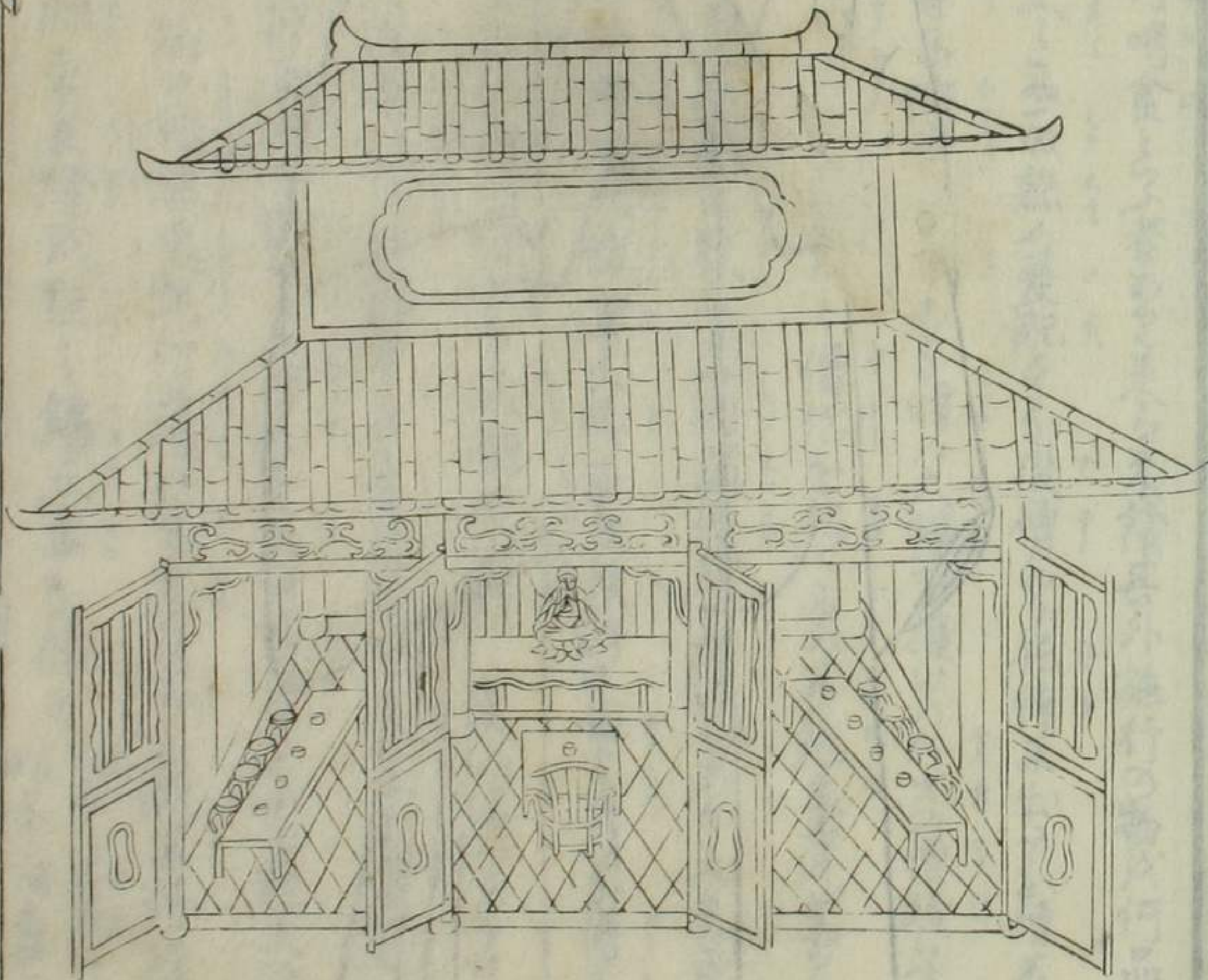
引磬



版雲



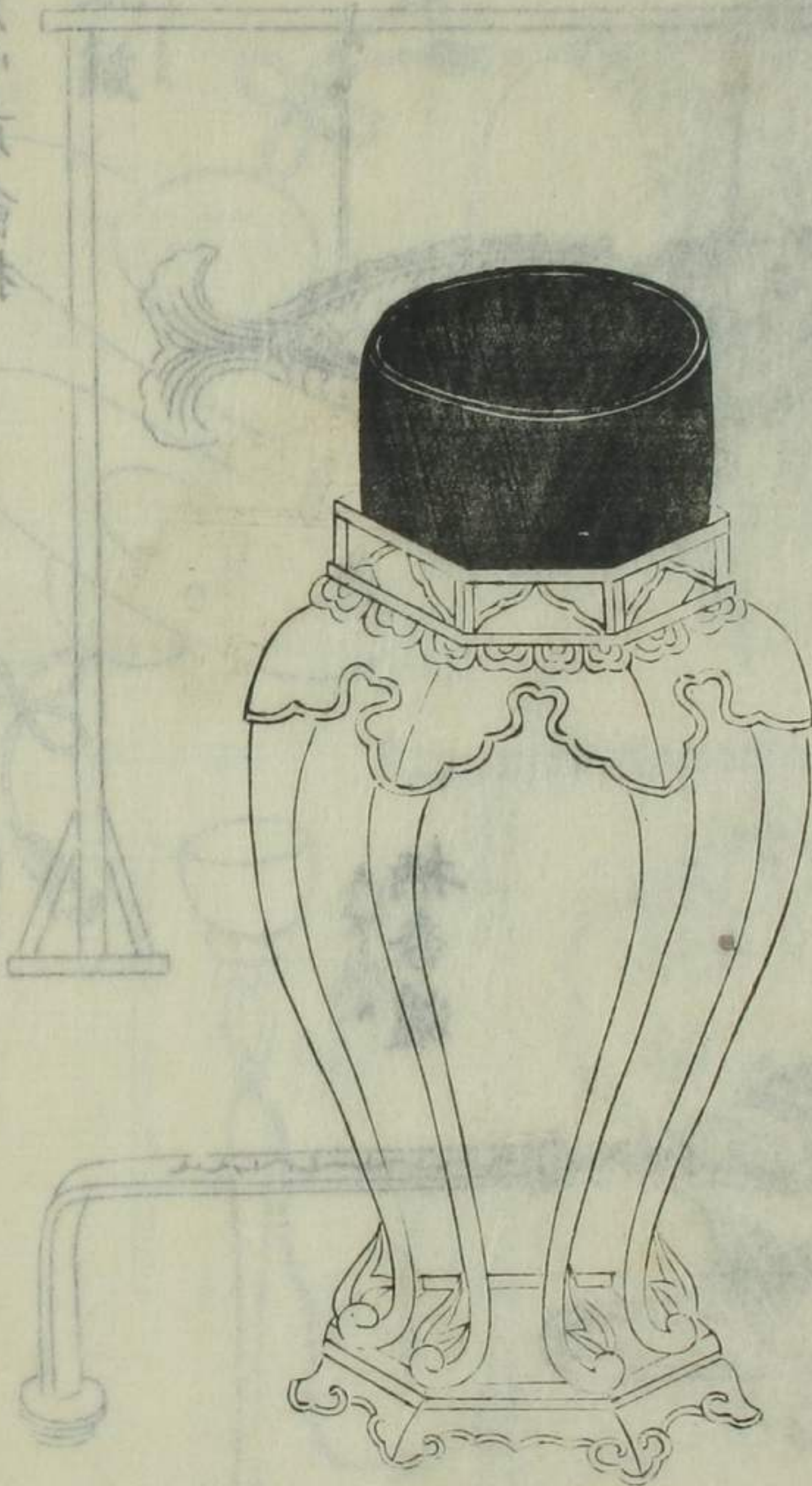
齋吃堂齋



僧徒

十二

齋堂前玲



銅磬

銅磬

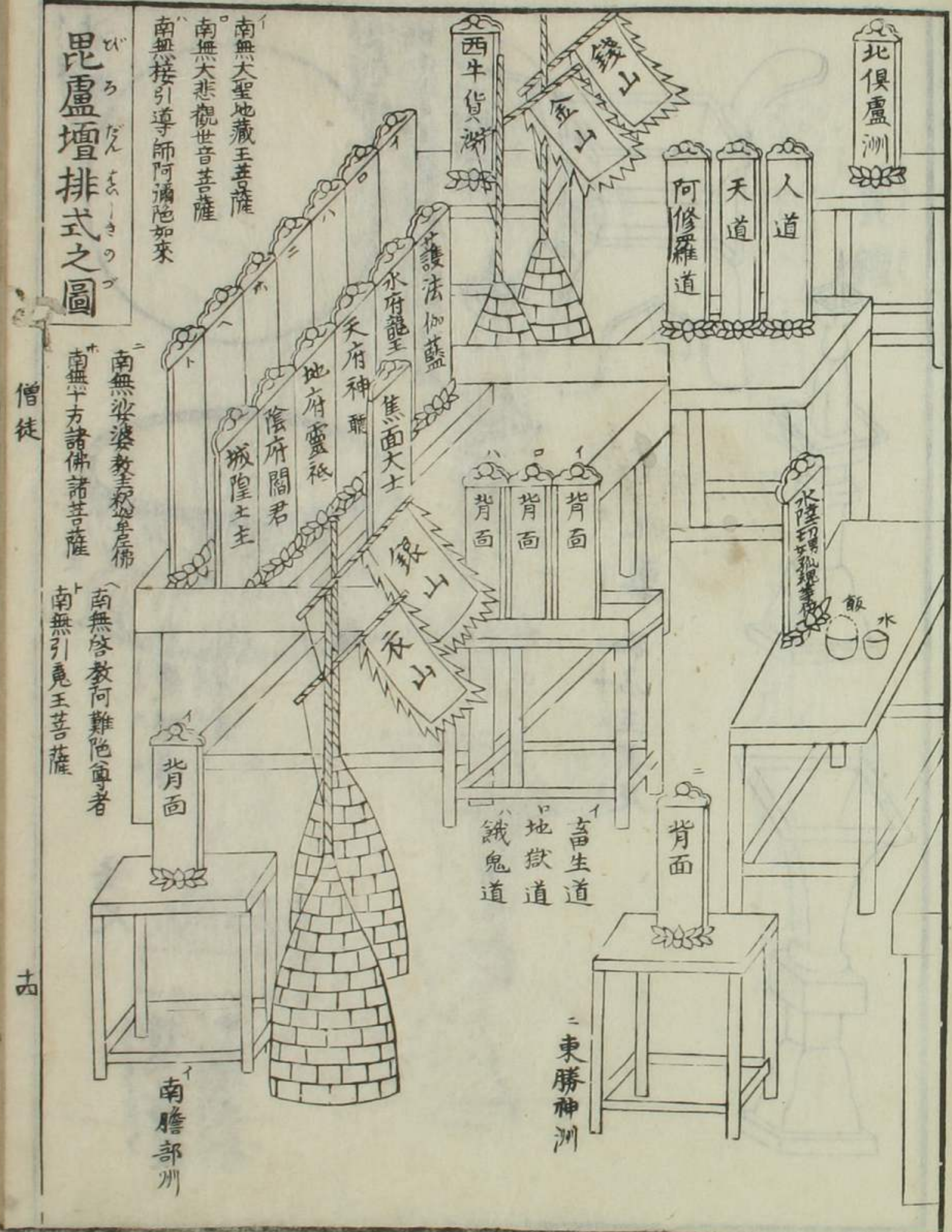
十一

遊方僧

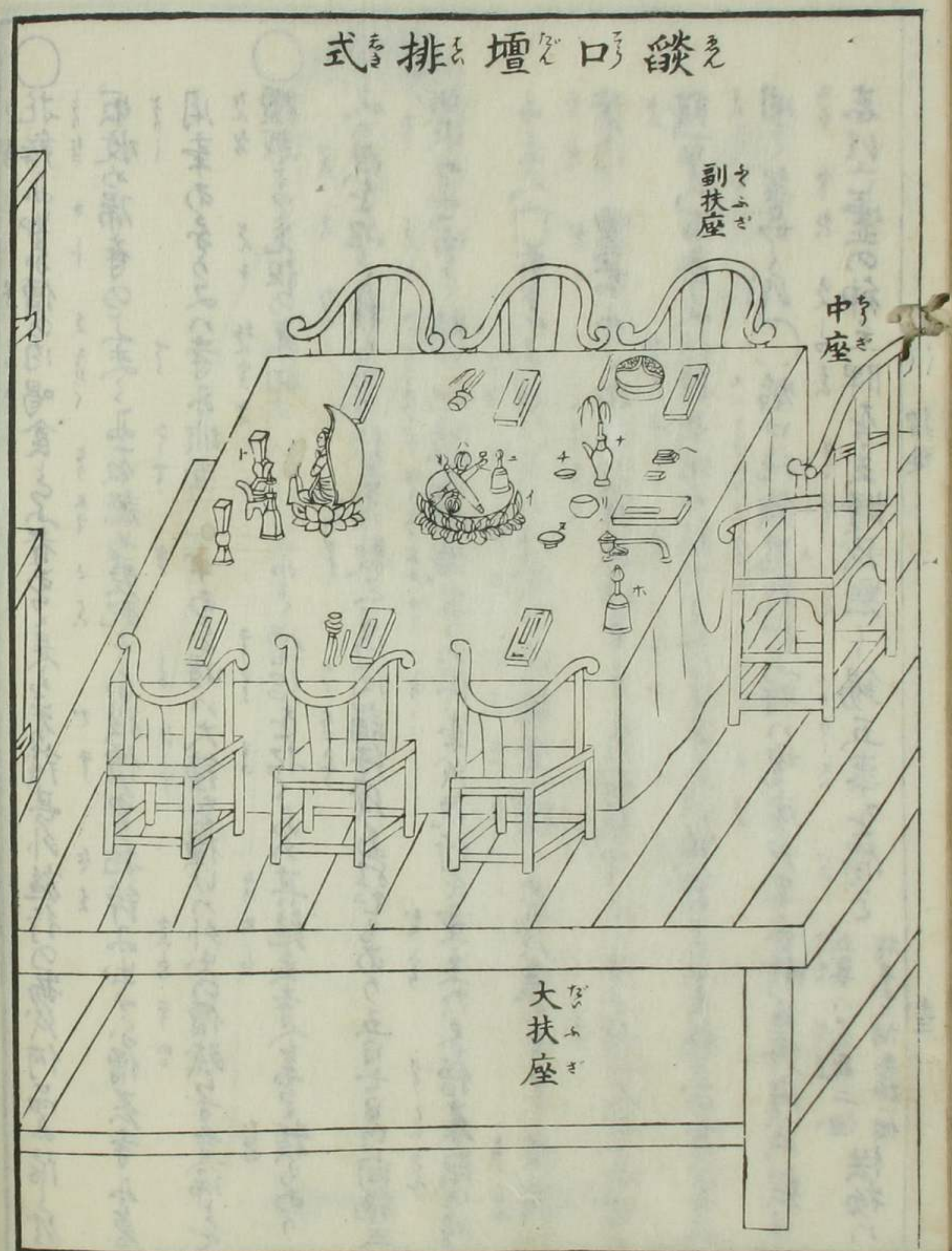


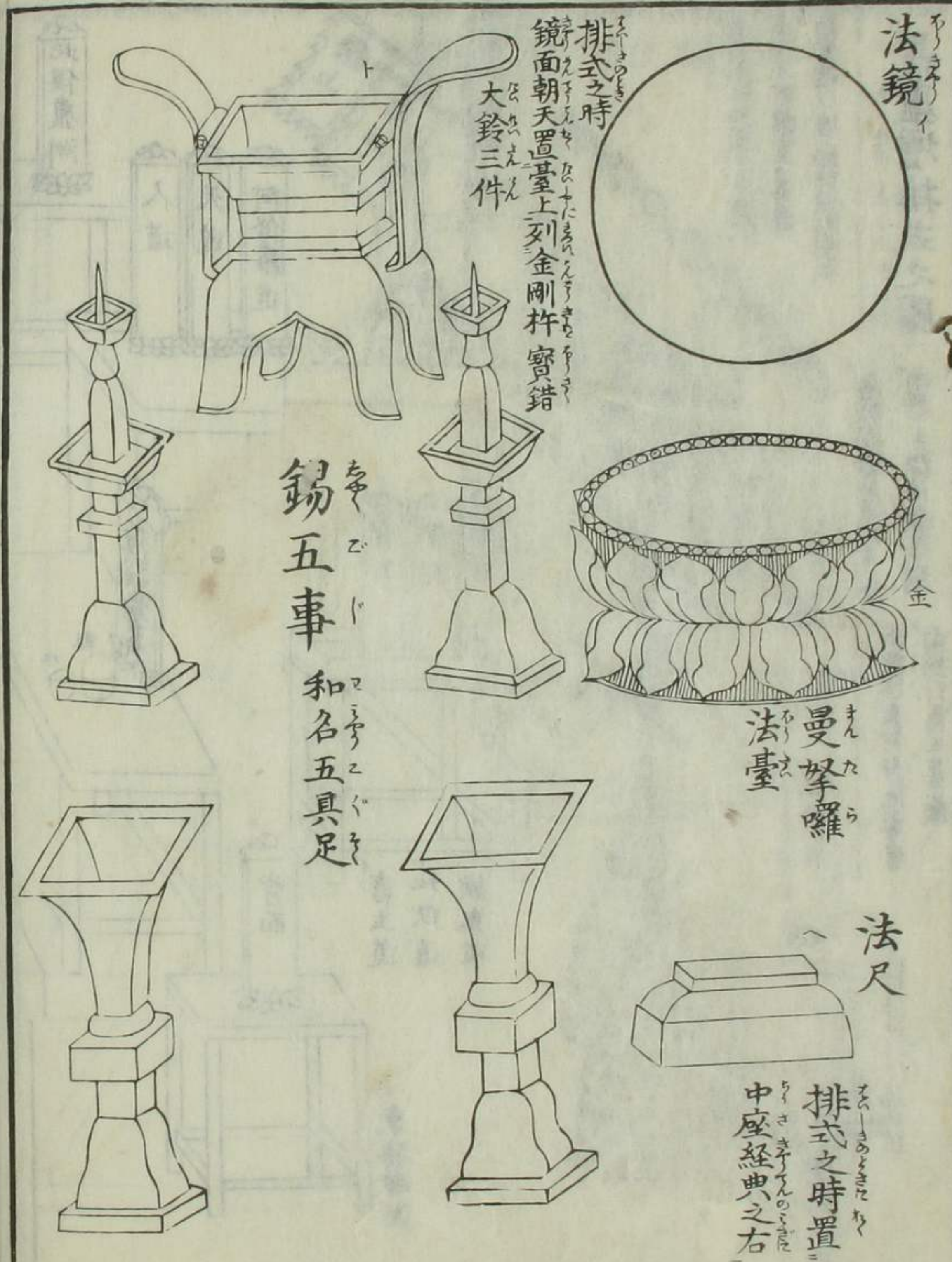
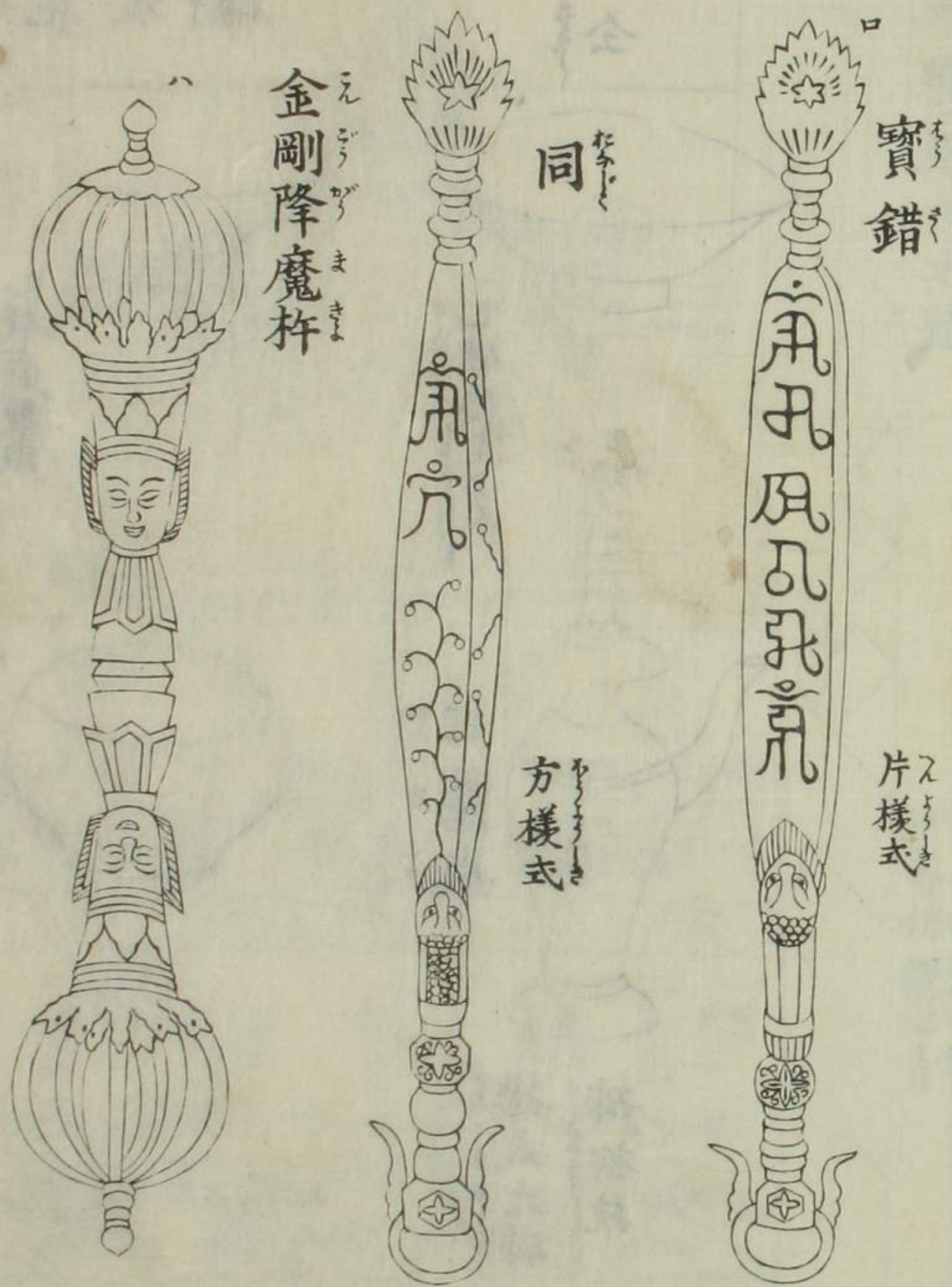
○托鉢みせの僧の内喝食とふ者あり是は米穀其外施行の物は何品も限らば
 取收め滞寺の上まゝぬ取認り差配とふ後僧あり托鉢みせの僧も急
 用事あり又の寺み非常の事あり時ハ大鐘を撞け外出の僧談子寺滞を
 檀越より先祖の年回其外法會あり僧侶を招き其施主寺年を頼もあり
 又の候を以て頼もあり供養日数二日の間誦経成るむあり五日七日の間施主
 の求めの如く焰口施餓鬼水懺等の佛事執行を重立たる僧來院の時
 主人門前まで出迎ひ互み往儀を述廳堂へ請へ茶代進め早くと家廟へ
 案内し靈茶めく拈香誦経以法事早くと布施やくて一日み僧一人前平僧ハ
 儀百文百五十文住持長老の銀十文程送ふ是成懺資とふを施主の貧富に
 因り等加るべし ○焰口施餓鬼執行ハ時の境度凡そ新お佛座成設け
 志以て靈の神主牌を之燈成點し錫五事を傍に
 五事ハ花瓶二個
 燭三三個香拈一個
 供物の

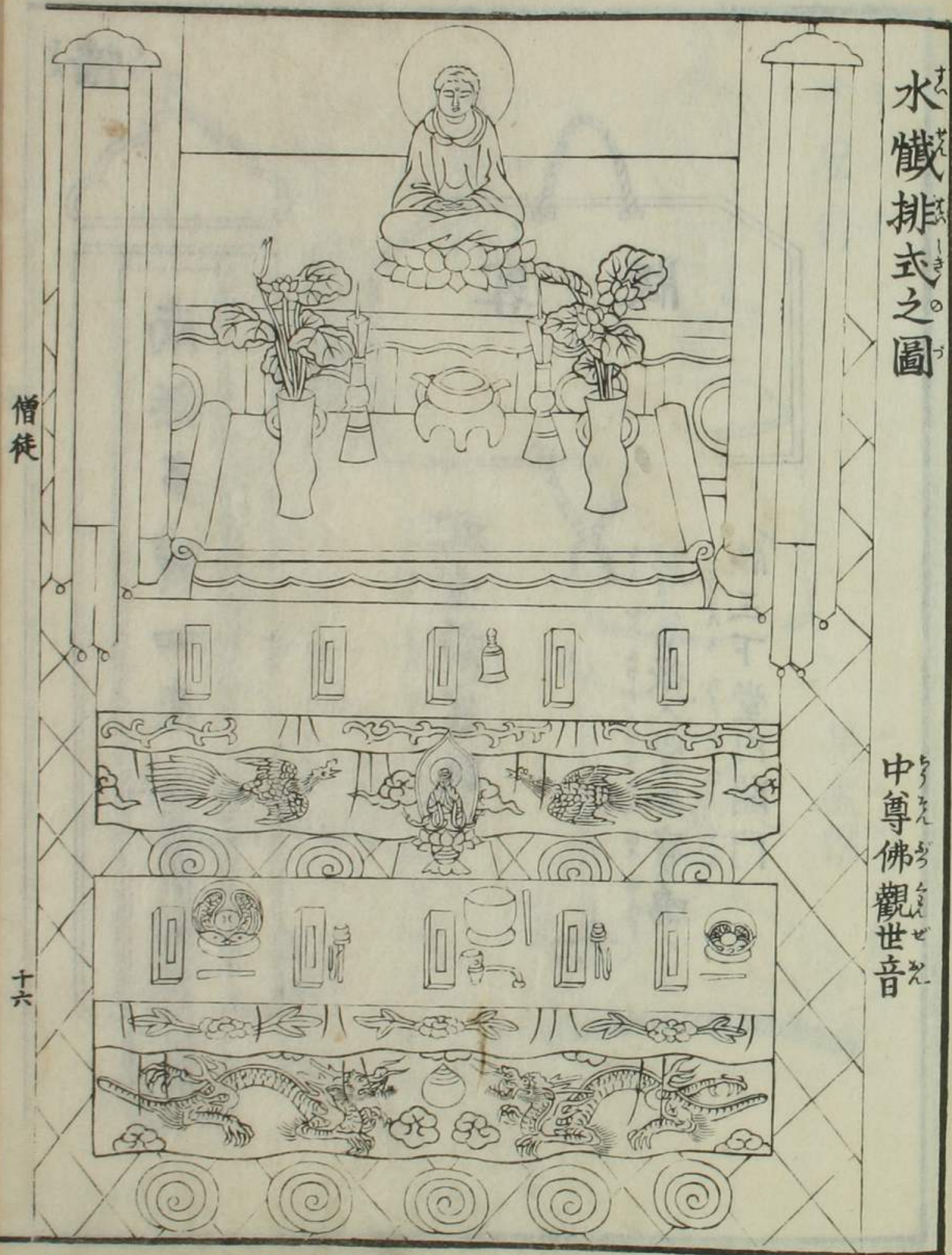
毘盧壇排式之圖



式排壇口燄







水儀排式之圖

中尊佛觀世音

僧徒

十六



全

花米

乙碟盛饅頭

乙碟盛花并米

甘露瓶

洒水器

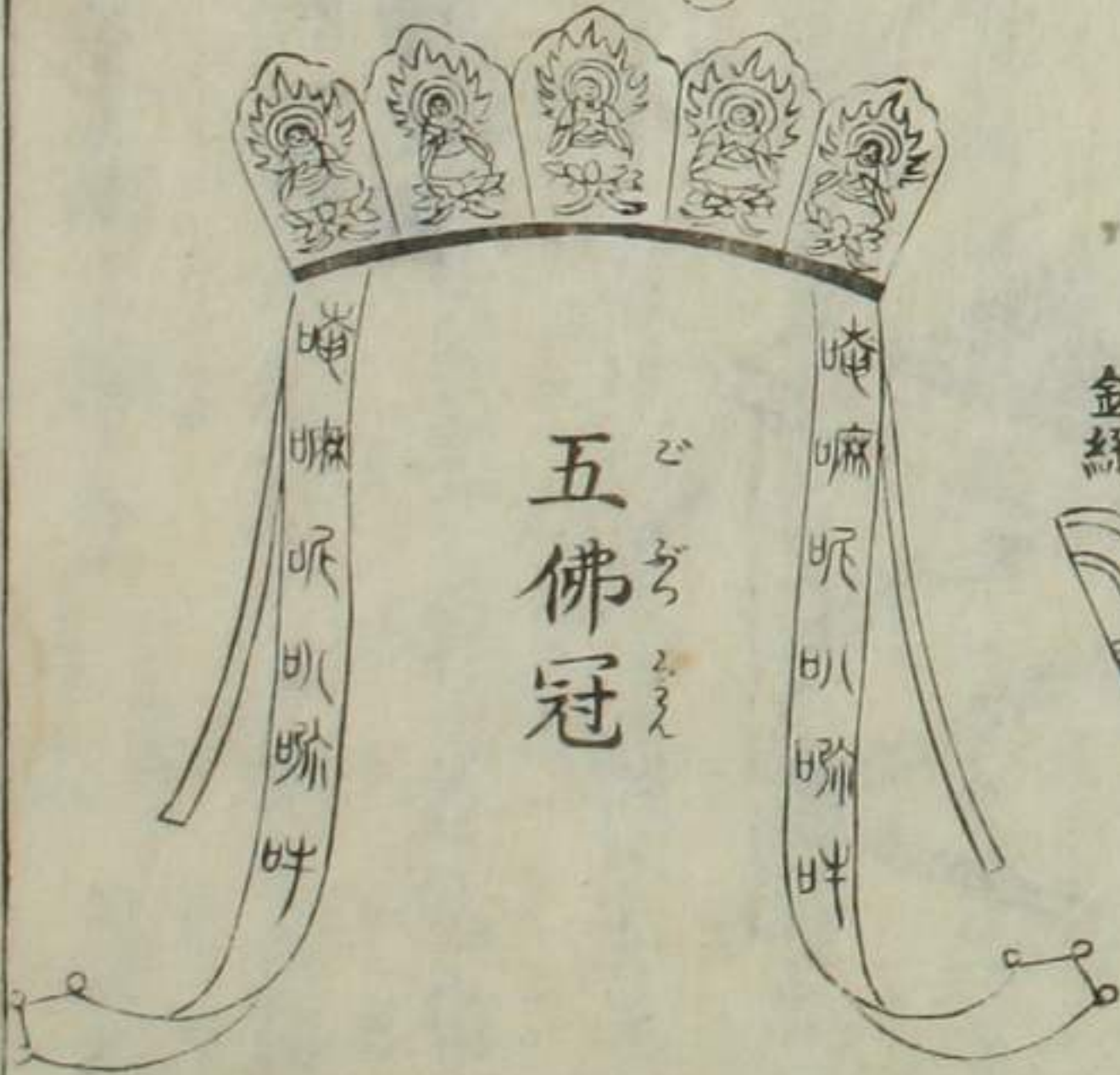
排式之時
挿柳枝



扶座鈴



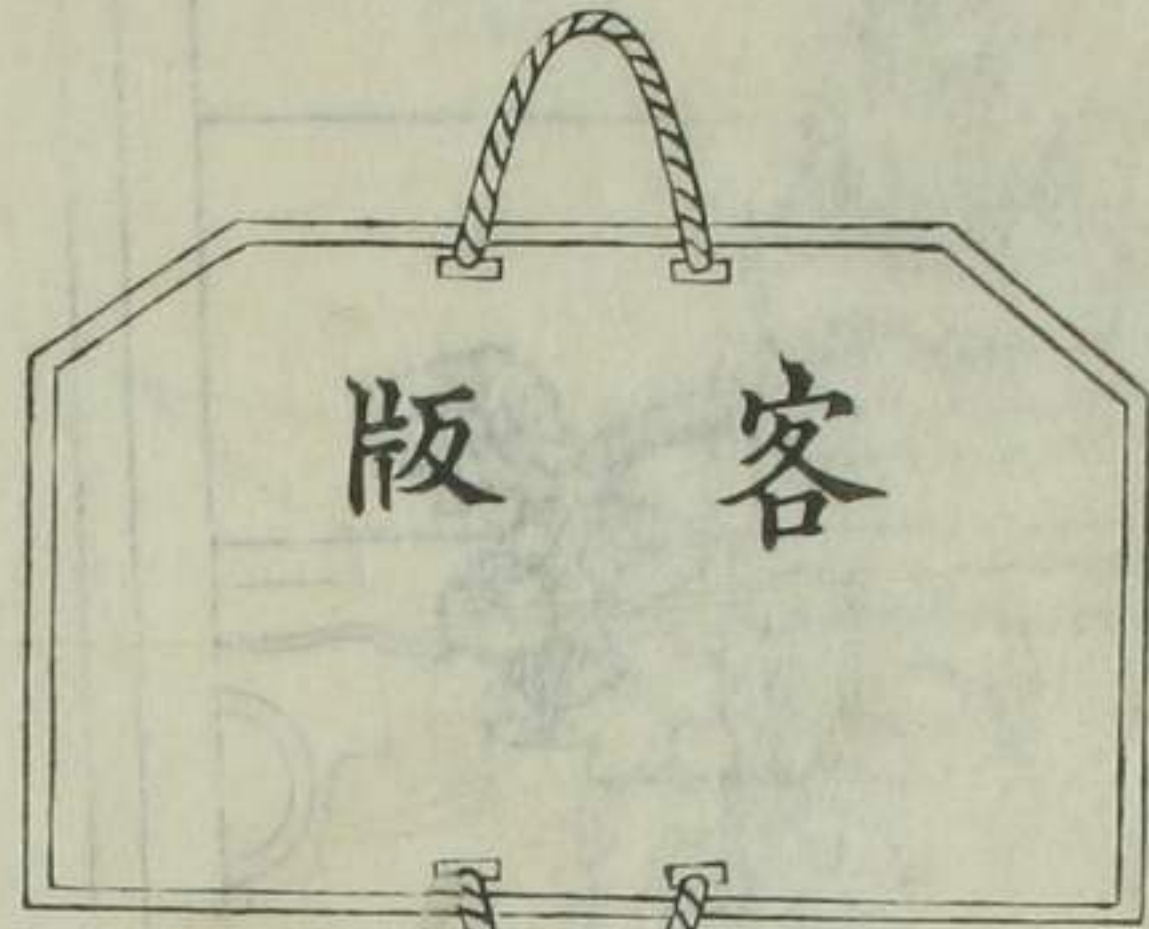
中座鈴



五佛冠



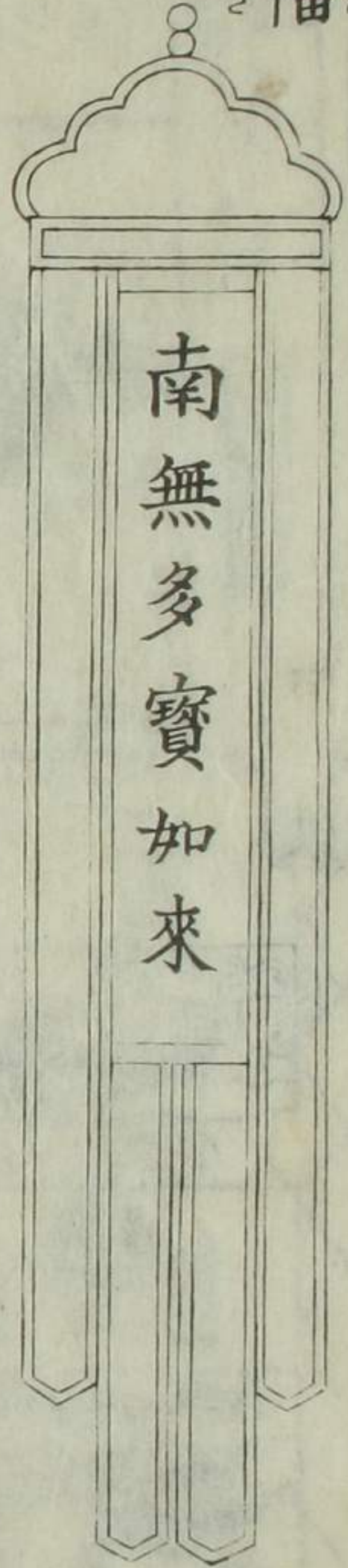
毘盧帽



客版

禪堂前客版

尊客欲入堂知賓鳴
版三下堂內開門

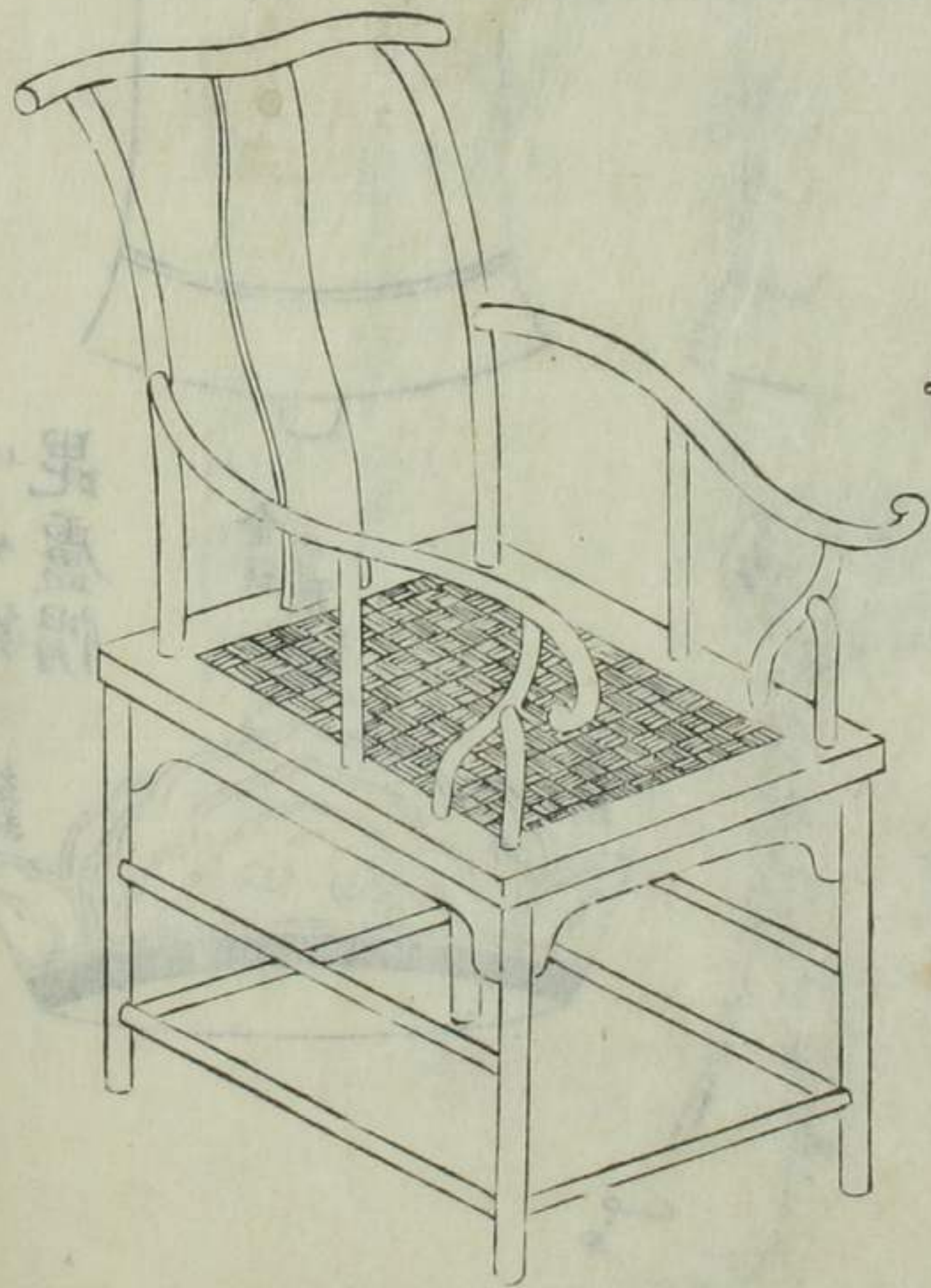


南無多寶如來



毘盧帽五佛冠合帶之圖

椅子



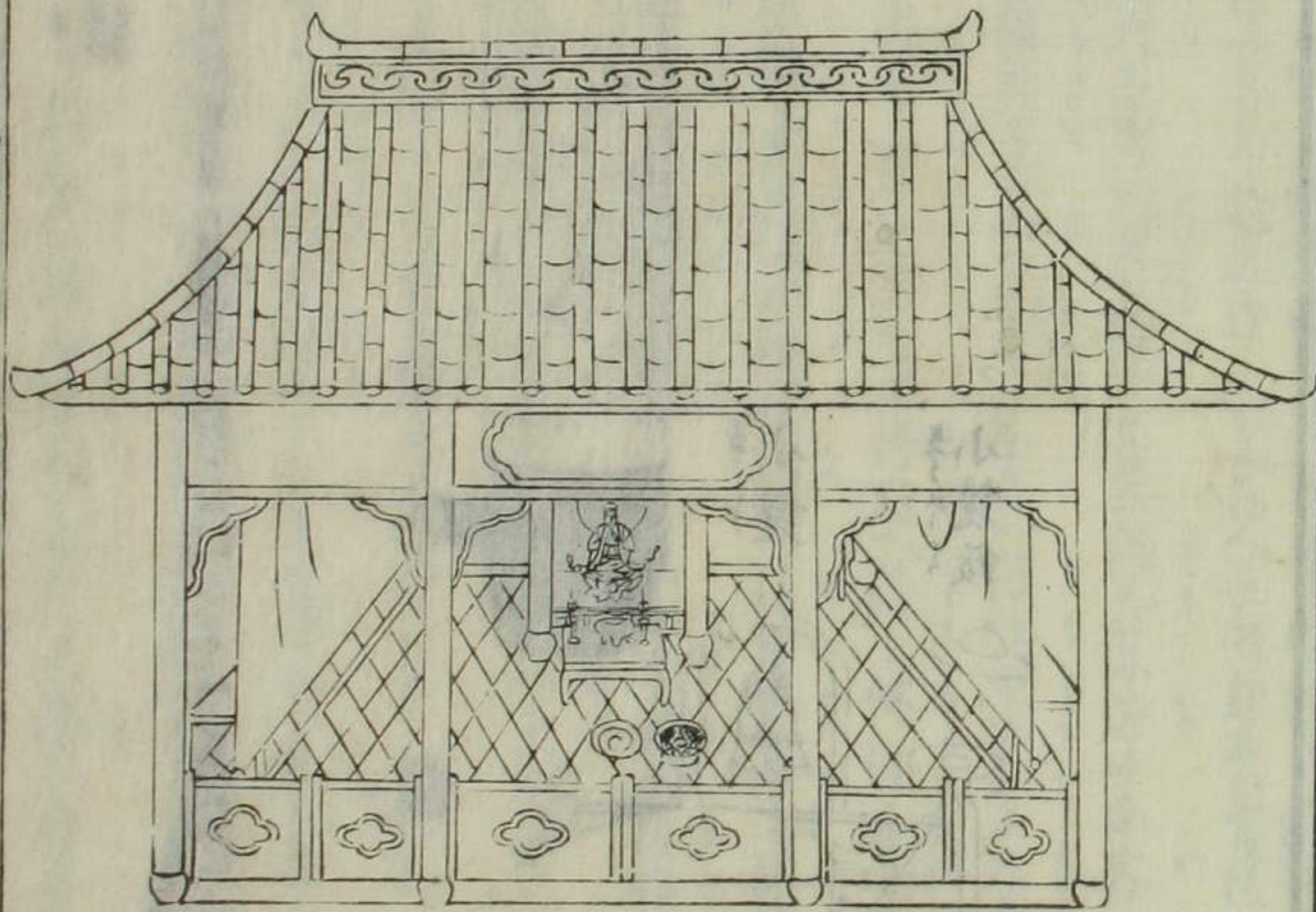
橋餅 桂圓 荔枝 其外砂糖菓子時候の菓物移く供其茶亦方二間高三間高の
 胡桃 荔枝花生 焰口壇を設け正面観音の像安置し寶鏡等の佛具を備付す且ほ
 香花點燈供物見合供を定式の供物あり一盃饅頭七の酒水二盃此二品を
 供檀の向めら同く焰口壇の毘盧壇を設け上壇に七佛の名號を書き
 牌を備 七佛の釋迦觀音阿彌陀地藏 下壇に面然大士護法龍天の牌を
 香花を供點燈供物等茶のぶを定式の供物あり一盃又九半坪行る
 さ三尺程の食卓を設け水陸一切男女孤菟等位と書記し香花點燈供物
 茶のぶと定式の供物あり大丸茶碗に飯を唯く盛酒水を多く供へ其
 茶碗高三間廻り九尺程の竹籠を山の形に搦く金銀の箔紙其外錢帛
 眞衣紙等みく張た多代二を一ら金銀山一ら錢衣山と記した糸籠成立誦
 經の僧七人 略すは五人 焰口壇み討て奉位を金剛上師とす 一名成中 座とす 左は大

僧徒

杖座有或副杖座と不陸元と其後之並に何止も椅子み坐し下はら大敷小敷
小鏡後等傍付あり或誦經み連く大衆の内一人めく鳴以中舞の僧ハ毘盧帽
と不佛冠を戴き鈴成振或は印成結び其餘杖座の僧ハ本魚引鼓成打具府の七
魂起度のた先借入るる不承成誦經中次すくく取捨酒水成ぬく鰻頭み枕字を
書合良臺み向く投捨尚又冥途ゆく金銀錢衣服を捨ふ意ゆく右金銀山錢
衣山成燒捨ふ此法在在家みくも至くも夜陰み起すぬ九二回時程もかか
水懺とら同く佛成設け香花點燈供物等揃みおれくを正式の供物
ふし前幅半同み長さ二間法の其成二行み其前み僧五人宛都合拾人の僧
夫は佛具成持何止も踏ん誦經あふ此法省畧す一日かも漸又二三日
繕ふもあり縮口水懺もに年忌法會み限くば家内安全柄し氣平愈等の祈
禱みも執り何止も施主の与ら任せく自宅みくも執行み其時法具諸道

具寺より持越其供養み應て僧の多少ありを其時親類朋友をも招き
僧侶打込齋非時等振落奉あは法事止み其日數みあはし勞金やして
僧一人前二三十日以下僧の高下施主の身分み應て送奉奉等くば若居
宅狭きら或は故障等ゆき寺に佛事を頼む時と前度菜料を納し施主
の求めみ應て供と成其時と寺みく齋非時の用意をれ施主あはし施
主の親類朋友み施成此れ施主の方より男女ともみ奉ふ夫婦の間に
別間みあはし附奉ふ奴婢等終はして僧侶と到來は接投禮儀おれを
此同み入るる○在家の位牌成寺院み安をす奉奉をれ奉奉と位牌
堂とみれと格別寺みおれ功あふ檀越ハ別み位牌成安をすあはし
香花を供奉す奉奉あり○在家喪中の時ハ日誦經頼むもあり又七日毎
み頼むもあり何止も施主の求めみ應て喪葬の時と僧七八人もあり

禪堂之式

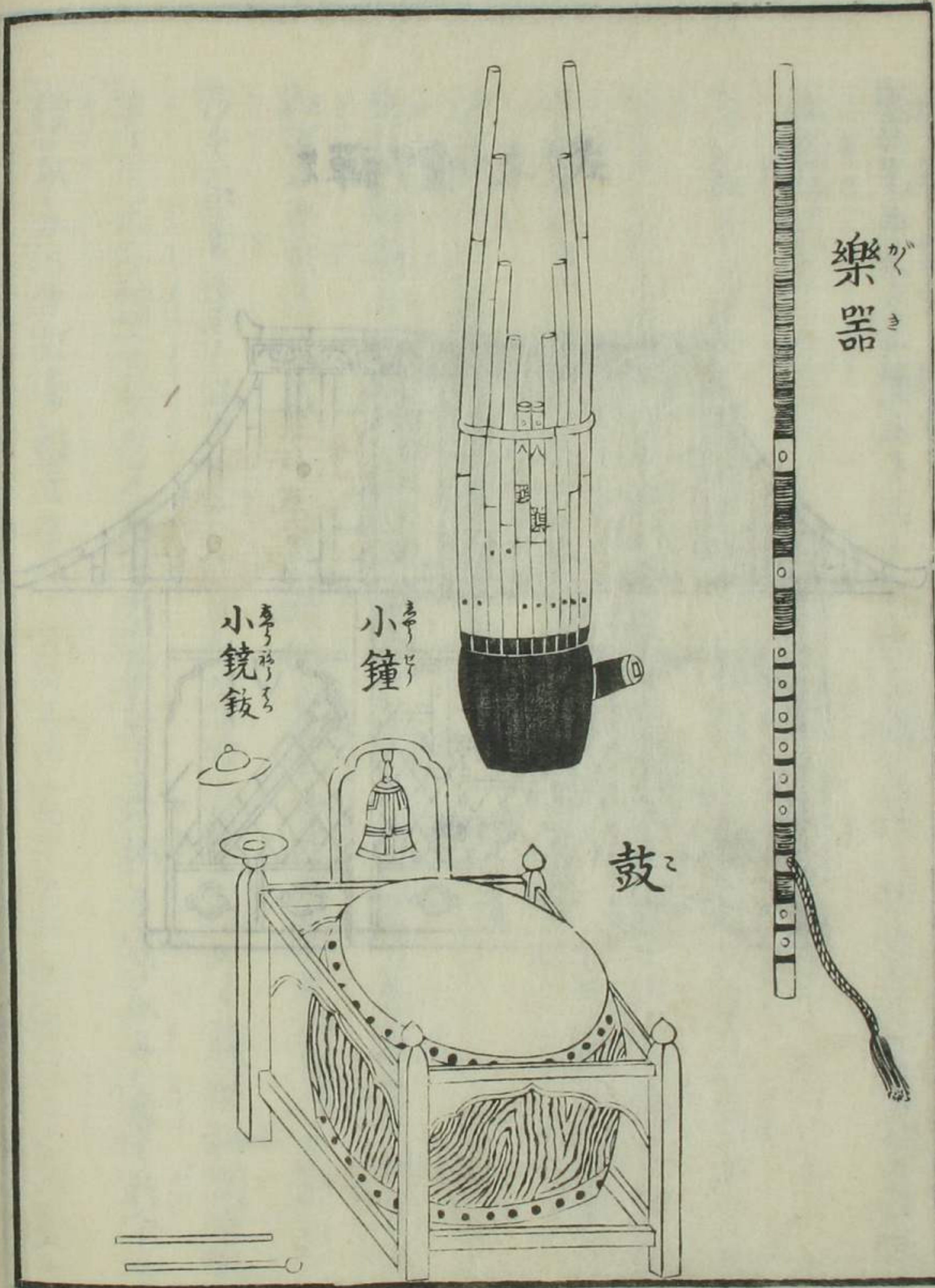


僧徒

二十

極の先か三平み諸みくまゝ久ふか膳を持二行ゆあゝび墓所近は
 添誦経はを定式みあゝは檀越より頼されば行事ふ
 七月盆ゆら寺院みあゝは施餓鬼執行すふ所もあり其寺の古格みく執
 行せむか所もあり ○十二月八日を臘八といふ朔日とて八日の曉まで昼夜一山の僧
 禪堂みあゝは座禪あふふ一日ぬ菓茶の粥を炊
 何れも吃し懇意の檀越も送ふ事あり
 御祈願所ふは差極ふ寺院ふ御祈禱の音の勅詔みく何れに
 何寺へ付しあはれは共寺へ頼遣は又ら官前の見斗ひを以て修行
 何れふ事もあり其下れみあゝはひ等かゝは寺院みく護摩神圖守札
 等を天子諸官一町等へ獻すふ事かゝ奇術と道家みく専ら行へども
 僧徒みくは行事なり

樂器 がき

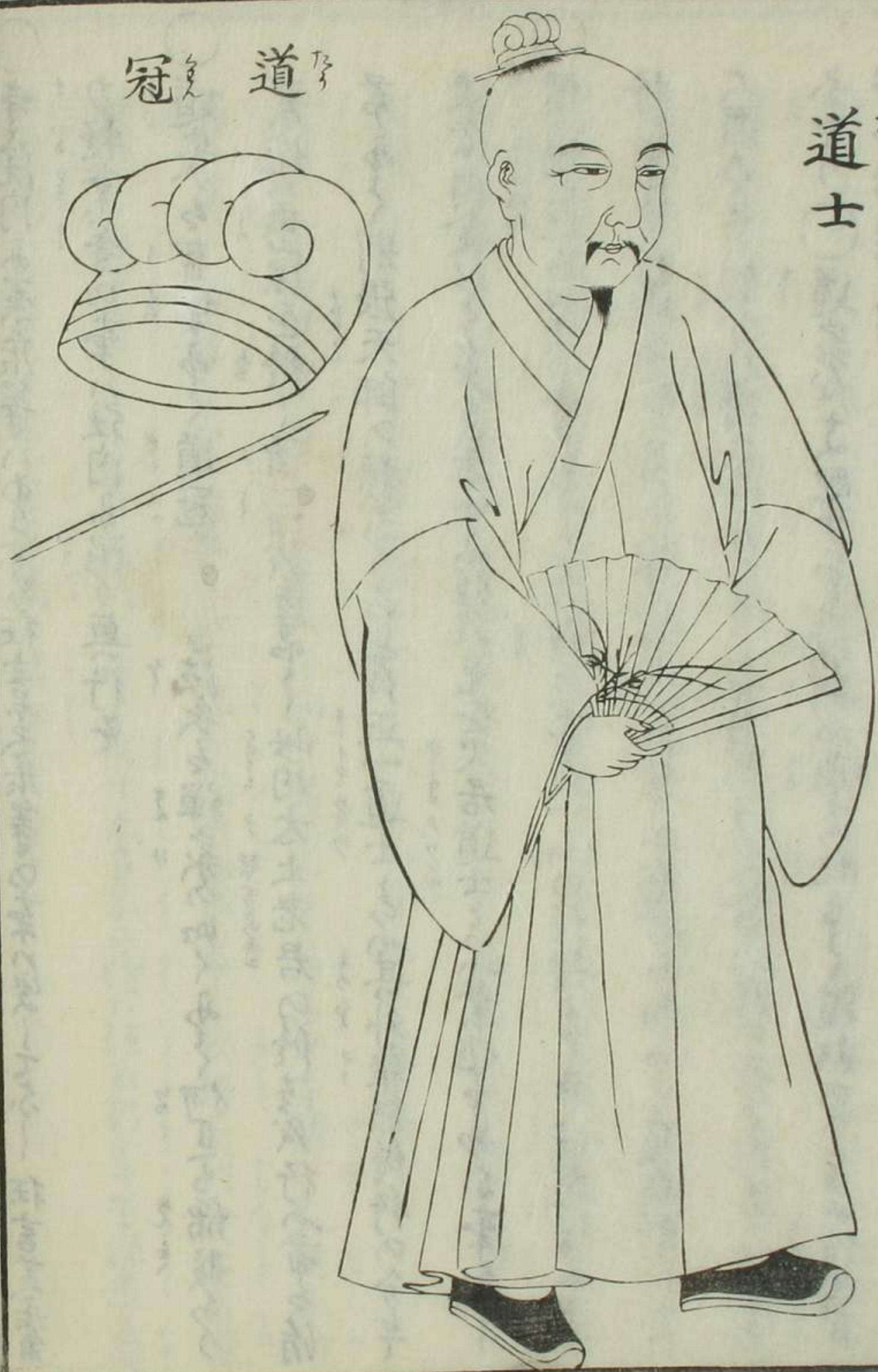


○官人寺素詣の節は常以達しあふ其時刻の官位の高下にも任持並に
 役僧山口も出迎しあふ大友系詣は其の禪堂みそと客版と不隔成叩け法堂
 の門代扉は法僧残らばあふ小官あふは役僧中出迎ふ大友れ時と鐘樓の鐘樓
 撞を敲を打あふは樂成奏して佛殿請は佛鉢をそ加客の各業内して
 並に方丈一俵の椅子を設け法成請は任持對座し知各側み侍系值座
 茶菓子其外時候の菓物等差出はたひみ寒暖の挨拶あふて御食應あふを
 酒烟もあふ林あふて出さば帰ゆえのあふく山門までおあふ此れ客の家あふ
 香金とて多少あふは金銀成差はらりす
 ○庶人系詣の時の先佛殿み禮拜し並み帰ふもあふ又と客殿ゆくあふく
 休息とてあふ客あふ應し値座とて系あふとあふもあふ或は菓子菓物等あふ
 あふと其の品等あふは任持み用向あふ又訪ひのた先見ふるは節と値

僧徒

道士

道冠



○護符等の事ハ僧家ヲ執リ世ハ道家ニシテ道士ハ極ク三清上

帝を祀ル三清上帝ハ中央玉清元始天尊ヲ曰ク
上清靈寶天尊九々太清道德天尊道家も都々寺と同様ニ一山あるも

市中に居位を不も社檀越等此事ハ僧家知事ナリ道士も

廻り深山に入り法修行を事ありもて僧尼スを裁け杖を突き

○且那と字事供古々あふりタニも當時めさか檀越タニとの呼ぶ

○江湖よりひみ結夏此事ハ畏節とも在家の知事ナリ

清俗紀聞卷之十三畢



清俗紀聞跋

向者余之在崎陽也。聽政之暇。使官屬近藤。與重林。負篋問清高其國之俗習。輒隨筆焉。又隨圖焉。終成一書。其起稿之始。余偶罹疾。而百事皆廢。及愈。瓜期已迫。故束說稿。齎還江戶。爾後

劇職不暇翻閱。因命臣津田永郁校訂分為十三卷。示諸林祭酒。請序其端。且請名書。祭酒名以清。倍紀。聞且序而還之。或勸上本公。諸同好。遂命剖剝。不日而刻成矣。澤正甫中伯毅亦序其端。嗚呼。雖編輯之名在。余彼官屬。苟力實為多矣。豈可虛其功哉。因備記。与此役者姓名于卷末。云寬政己未冬十月中。川忠英跋。

赤峰脇田順書



大通事

高尾維貞

彭城斐

清河壁

平野祐英

彭城明矩

神代文鳳

穎川良友

彭城昌尊

吉島潜

小通事

畫工

安田素教

石崎融思

游竜賢

彭城以貞

中山保高

穎川惟賢

平井惟德

陽忠廉

神代干貴

清國蘇州

孟世燾

蔣恆

顧鎮

湖州 費肇陽

杭州 王恩溥

周恆祥

嘉興 任共瑞

寬政十一年己未八月新鐫

東都書林

本石町四丁目大横町

堀野屋仁兵衛

